

父さんの最後を遂げられるやうに望みます。

グレイト・ハート 全く頼もしい若者たちですよ、心から父の道を選んでゐるやうに見うけられます。

ガイオ それがすなはち私の申し上げたことなので、それ故にクリスチアンの家族はいつまでも地の面にひろがるやうに思はれ、また更に地上に増えて行くやうにも思はれるのです。それでクリスティアナは息子たちのために誰か娘さんを捜してそれに婚約をさせるといいですよ、この人たちの父の名とその親たちの家が世の中に決して忘れられないやうに。

オネスト この家族が没落して、絶えてしまふのは遺憾です。

ガイオ 没落することはあり得ないのですが、減少することはありませう。しかし、クリスティアナは私の忠告を聞かれるがよろしい、それが家を支へる方法です。

で、クリスティアナ、とその宿の亭主は言つた、私はあなたとあなたのお友達のマーシー、美しいお二人連れにお目にかかることを喜んでゐます。それで、ひとつ私の忠告を容れて、マーシーをあなたのもつと近い関係の者にせられてはいかがですか。若しこの女さへ承知なら、御長男のマシウに嫁がせるのです、それがあなたのためにも地上に子孫を残す道ですよ。そこ

でこの縁組は取極められ、時を経て二人は結婚した。が、それについてはまた後に述べる。

ガイオは又さらに進んで言つた、私は今、女たちのために辯じて、その非難を取り去らうと思ひます。何故なら、死と呪詛が一人の女に依つて世の中に來たやうに（創世記三）、命と健康も亦一人の女に依つて世の中に來たのです、『神その御子を遣し、これを一人の女より生れしむ。』（ガラテヤ書四・四）。それどころか、後に來た者が、いかにかれらの母（註。エバ）の行を嫌はしく思つたかといふことを示すために、「舊約」の女性は子供を切望しました、といふのは、萬一、女の中のどれか一人が世の救主となることもあらうかと思つたからです。

私はまた言はうと思ひます、救主が來られた時、女たちは男や天使よりも先に喜んだことを。（ルカ傳二―原註。しかし同書一・三九―五六の方がこの場合の事實に一致する）。私は男がキリストに―グロート（註。四ペンスに當る銀貨）。でも與へたといふことを讀まないのですが、女たちは彼に従ひ、その生計の費用の中から彼の必要に供へました。（ルカ傳八・二三）。その足を涙で洗つたのは一人の女でした。（ヨハネ傳一・二、一二・三）。彼が十字架に趣きたまふ時に泣いたのは女たちでした（ルカ傳二三・二七）、十字架より彼に従ひ、その葬られたまふ時、その石棺の側に坐つたのは

女たちでした。(マタイ傳二七・五五、五六、六一)。その復活の朝、最初お逢ひ申しあげたのは女たちで、最初、そのお弟子たちに彼が死者の中から蘇生せられたとおとづれをもつて行つたのは女たちでした。(ルカ傳二四・二二、二三)。女たちはそれ故に大いに御寵愛を受けた者です、また、これらのことに依り、彼等が私どもと共に「生命の神恩」を領すべき者であることを示してゐます。

今や料理人は人を送つて夕餐が殆んど出来たことを知らせ、また一人の者を送つて食卓の布を敷き、木皿を配り、鹽とパンとを型通りに並べた。

すると、マウシは言つた、この食卓の布と、かうした夕餐の先觸を見ると、これまでに覺えたよりも更に大きな食慾が起ります。

ガイオ そのやうに、この生であなたに力を添へるすべての教があなたの中に、彼の王國で大王の夕餐に就くことへの更に大きな願を起すことになりたいたいものです。この世の一切の説教も、書物も、儀式も、私どもがその家に辿りついた時、「主」が私どものためにととのへ給ふ宴に比べるならば、唯、木皿を並べたり、鹽を卓の上に置いたりするやうなことなのですから。

そこで、夕餐が届いた、さうして先づ第一に「擧祭の肩」と「搖祭の胸」が彼等の前の食卓

に置かれた、これは彼等が神へ捧げる祈禱と感謝をもつて食事を始めなければならぬといふことを示すためである。(レビ記七・三二、三三、三四)。「註。邦譯聖書には「擧げたる腿」「搖れる胸」とある。前者は生贄の右の肩肉で、祭司の司る部分であり、後者はその他の祭官の司る部分である。前者は上下に動かしながら祭壇に捧げる。後者は前後左右に動かしながら祭壇に捧げる。「擧祭の肩」をもつてダビデはその心を神にさし上げ(詩篇二五・一)、また、彼の心の横たはつてゐる「搖祭の胸」をもつて、それをもつて彼は堅琴を奏する時、それに倚りかかるのが慣であつた。この二つの皿は極めて新鮮であり、美味であり、一同舌鼓をうつてそれを食べた。

人人が次に持ち出したのは血のやうに赤い葡萄酒の盃であつた。(申命記三二・一四)。そこでガイオは彼等に言つた、お心おきなく飲んで下さい、これはまことの葡萄の汁で、神と人の心を悦ばしめるものです。(士師記九・一三)。そこで、彼等は飲み、且つ楽しんだ。(ヨハネ傳一五・一)。

その次のものはパンの破片を十分に刻み込んだミルクであつた。が、ガイオは言つた、それは少年たち(こども)にあげて下さい、それをもつて大きくなるやうに。(ペテロ前書二・一、二)。

やがて、適當な時に人人はバタと蜂蜜を持ち出した。するとガイオは言つた、これをお心おきなく召上つて下さい。これは元氣をつけ、あなた方の判断力と理解力を強めるにいいもので

す。これは幼児であられた時の私どもの主の召上りものでした。『バタと蜂蜜とを彼は食はん、そは悪を拒み、善を選ぶを知ることを得しめんためなり。』(イザヤ書七・一五。欽定譯聖書。邦譯は大分違つてゐる)。

すると、人人は林檎の一皿を持ち出したが、それは大さう味のよい果實であつた。そこでマシウは言つた、林檎はかういふものだつたのだから、これに依り、これでもつて「蛇」がわれわれのはじめの母を誘惑したあの林檎を私どもが食べてもいいものでせうか。

すると、ガイオは言つた、

われどちの誘はれしは林檎なりしも、

靈魂を汚ししは罪にして林檎にあらず。

禁斷の林檎を食へば血を腐れしむ、

命を受け、これを食ふ時、われに益あり。

神の鳩、その教會よ、その酒の瓶より飲めよ、

また愛になやめる者よ、林檎を食へよ。

すると、マシウは言つた、私はしばらく前に果實を食べて病氣になつたものですから、躊躇

したのです。

ガイオ 禁斷の實は病氣にさせます。が、主の許したまうたものはさうでありません。

かういふ風に話をしてゐる間に、今一つの皿がさし出された、それは胡桃の一皿であつた。

すると食卓に就いてゐた或者者が言つた、胡桃は弱い齒を悪くする、特に子供の齒を。それをガイオが聞いた時、彼は言つた。

むつかしき聖句は胡桃、(詐欺とは言はじ)、

その殼は食ふ者より核を守れり。

それ故に、殼を割るべし、さらば肉あり、

ここに出だされしは割りて食ふためなり。

すると、一同極めて楽しくなり、多くのことを話しながら、長い間、食卓に就いてゐた。そこで、老紳士は言つた、御亭主、私どもが御馳走の胡桃を砕いてゐる間に、どうかこの謎を解いて下さいませんか。

人ありき、狂へりと言ふ者あれど、

棄て去るがままに得ること多かりき。

すると、彼等はみな親切なガイオが何と言ふだらうかと思ひながら十分に注意してゐた、それで、彼は暫く静かに坐つてゐたが、やがてこのやうに答へた。

その富を施す人は施せる

それだけを、その十倍を、得べきなり。

すると、ジョウゼフは言つた、よもやお分りになるとは思ひませんでしたよ。

それはね、とガイオは言つた、この道にかけては修業を積んでゐるのです。経験のやうに教へてくれるものはありませんよ。私は私の主人から親切にすることを學びました。また経験に依り、それでもつて利益を得たことをさとつたのです。『ほどこし散らしてかへりて増すものあり、與ふべきを吝みてかへりて貧しきにいたる者あり。みづからを富ましめてしかも何物をも持たざるあり、みづからを貧しくしてしかも大なる富を持てるあり。』(箴言一・二四、一三、七。欽定譯聖書。一三・七の邦譯は少し違つてゐる)。

すると、サミュエルはその母クリスティアナに言つた、お母さん、ここは大さう善い人のお家です。ここにしばらく滞在しようではありませんか、さうしてこれから先へ進むまへに、ここでマシウ兄さんとマーシーの結婚式をしようではありませんか。

それを亭主のガイオは聞いて言つた、大賛成だね。

かういふわけで、彼等は一ヶ月以上もそこに滞在した、さうしてマーシーはマシウにかたづいた。(註。マーシーとマシウの年頃から考へると、この結婚は少し無理である。殊にすぐあとでマーシーが少年を寢床につかせる所などは愈々矛盾を感じしめる)。

彼等がそこに滞在してゐる間、マーシーはその慣であつたやうに、いつも貧しい人人に施すための外衣や着物をこしらへるので、そのために巡禮に對する大さう好い評判が立つやうになつた。

しかし、私どもの話に立ちかへることにする。夕餐の後少年たちは寢床へ行きたいと言つた、彼等は旅路に疲れてゐたからである。すると、ガイオは人を呼んで彼等の部屋へ案内させやうとした。が、マーシーは言つた、私が寢床へ連れて行きますやうと。そこで彼女は彼等を寢床につかせた、が、他の者は夜通し起きてゐた。といふのは、ガイオとこの人たちはまことに性の合つた對手であつたので、何としても別れるに忍びなかつたのである。そこで、彼等の「主」のことや、彼等自身のことや、彼等の旅のことを大いに語り合つた後に、オネスト老人、例のガイオに謎を持ちかけた人がこつくりこつくりとやり始めた。すると、グレイト・ハートは言

つた、どうせられました、お眠くなつたやうではありませんか、さあさあ、目をこすつて下さい、そら、謎を解いていただきますよ。すると、ミスタア、オネストは言つた、承りませう。

そこで、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、

殺さむとする者は先づ負けざるを得ず、

外に生きむとする者は先づ内に死なざるを得ず。

やあ、とミスタア、オネストが言つた、こいつは難かしい謎です、解くのもむつかしいが、實行するのは更にむつかしい。が、さあさあ、御亭主、と彼は言つた、私は私の役割をあなたにお譲りしたいと思ひます。どうかこれを解いて下さい。仰有ることを拜聴いたしませう。

いや、とガイオは言つた、これはあなたへ持ちかけられたものです、だから、あなたがお答へになるものと思はれてゐますよ。

すると、老紳士は言つた、

罪を死に至らしめむとする者は

神恩にて先づうち勝たれざるを得ず。

生ける者、げにもと思はしむるには、

その人のみづからに死なざるを得ず。

その通りです、と、ガイオは言つた、結構な教説と経験がこれを教へてゐます。先づ神恩が示現し、その榮光に依つて靈魂にうち勝つまでは、罪に抵抗するといふことは全然無益なことなのです。それに、若し罪といふものがサタンの素であり、それで以て靈魂が束縛せられてゐるものであるならば、その弱點より釋かれる前にどうして抵抗することが出来ませうか。

第二に、理性なり神恩なりを身に覺えてゐる者は誰でも、その人自身の悖徳に對して奴隷であるやうな者が神恩の生ける記念碑であるとは信じないでせう。

そこで今、ふと思ひ出しましたから、聞いておかれる値のある話を一つ致しませう。巡禮に出かけた二人の男がありました、一人は若い時に始め、今一人は年をとつてから始めたのでした。若い男は強い悖徳と取つ組み合はなければならず、年をとつた男は性情の衰へに依つて衰へてゐました。若い男は年をとつた男と同じやうに歩調を亂さず、どこからどこまでも同じやうにかかるがと道を辿つて行きました。さて、この二人の中、誰が、或はどちらが、最もあきらかに輝く神恩をいただいたと思はれますか、といふのは、二人とも一見同じやうなものと思はれたからです。

オネスト 若い男に相違ありません。何故なら大なる障碍に抵抗する者は最も強い方であるといふことの最もたしかな證據を示してゐます。老齡といふものは必ずさうだと思はれますが、その半分にもあたらぬ程の障碍にも出會さないものと歩調をあはせる場合にはなほ更のことです。

それに、私の観てゐるところでは、老人たちはこの誤謬でもつて得意になつてゐます、といふのはすなはち、性情の衰へといふものを、神恩に依る悖徳の克服と考へ、さういふ風にしてとかく自分を欺くのです。尤も、神恩に満ちた老人たちは、諸事萬物の空なることをよく見て來た者なのですから、若い者に忠告を與へることはそちらの方が出来るわけです。けれども、老人と若い者とが一緒に出かけるといふことになる、若い者の方が彼の衷の神恩のはたらきを正しく發見するに都合のよいものをもつてゐます、老人の悖徳はもとより自然に弱いものではありませんが。

かうして彼等は夜あけまで話しながら起きてゐた。さて、家族の者が起きた時、クリステイアナはその子ジェイムズに聖書の一章を読むやうに命じた、そこで彼はイザヤ書の第五十三章を讀んだ。彼が讀み終つた時、ミスタア、オネストは、救主が燥きたる土より出で來るとか、

又彼に於いては容なくうつくしきもなしとか言はれてゐるのは何故であるか、と尋ねた。「註。

イザヤ書五三、二、三参照。

グレイト・ハート すると、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、第一に對しては、キリストがそこから出て來られた教會は當時宗教の生氣と精神を失つてゐたから、と私はお答へします。第二に對しては聖言は不信徒の身になつて言つたものであり、その人たちは「王」の御心の中まで見ることに出来る眼を缺く故に、すなはち彼をその表面の賤しさに依つて判斷するのであると申します。

寶石が粗末な殻で蔽はれてゐることを知らない人たちとちやうど同じやうな者で、その人たちはさういふものを見つけますと、見つけたものが何であるかといふことを知らないところから、人人がありふれた石を棄てるやうに棄ててしまふのです。

ところで、とガイオは言つた、今、あなた方はここに居られることでもあり、ミスタア、グレイト・ハートは武藝の妙を得てゐられるのですから、どうでせう、飲食して心氣を回復した後、野原へ歩いて行つて、何か益になることを行ふことが出来ないものか、ひとつ考へて見やうではありませんか。ここから一マイルほど行つたところに巨人、スレイ・グッド〔殺善氏〕と

いふ者がありません、そいつがこのあたりの「王の公道」を大さうなやますのです。その巢窟がどの邊であるかといふことは私が知つてゐます。こいつは大勢の盜賊の主人なので、このあたりからこいつをとり除くことが出来ればいいことだと思ひます。

で、彼等は同意して出かけた、ミスタア、グレイト・ハートはその劍と兜と盾をもち、その餘の者は槍と棒をもつて。

そのゐるところへやつて来ると、彼等は彼がその僕どもが道で捕へて、彼のところへ連れて来た、フィブル・マインド〔弱心氏〕といふ者に掴みかかつてゐるところを發見した。今や巨人はこの男の持ものを掠奪してゐたのであるが、その後ではこの男の骨をつつかうといふ魂膽であつた。元來こやつは人肉を食ふ者であつたから。

さて、ミスタア、グレイトとその友が彼等の武器をもつて岩窟の口へ現れたのを見ると早速、彼は何の用事だ、と尋ねた。

グレイト・ハート 汝に用事がある。汝が「王の公道」から引曳り出しては巡禮を殺した、あの多くの者の恨を晴らすために来た者だ。だから、その岩窟から出て来い。そこで、彼は武器をとつてあらはれた、それから彼等は戦闘に出て行き、一時間以上も戦つた、そこで、息をつくた

めに立ちとどまつた。

スレイ・グッド すると、巨人は言つた、何故汝らはこの己の領土にゐるのだ。

グレイト・ハート さきにもさう言つたやうに、殺された巡禮たちの讐をかへすためだ。そこで彼等はまた渡り合ひ、巨人はミスタア、グレイト・ハートをたちちとさせた、が、彼は再び勢を盛りかへし、その心の大勇を揮ひ、巨人の頭と兩脇にしつかりと打つてかかり、結局その手から武器をたたき落してしまつた。そこで彼を撃ち、彼を殺し、その頭を斬り放ち、これを旅館へ持つて行つた。彼等が引き上げて歸つた時、彼等はその頭を家族の者に見せた、それから、これまでも他の者をさうしたやうに、それをかかけて、向後、彼のやうなことをしようとする者への見せしめにした。

そこで、彼等はミスタア、フィブル・マインドにどうして彼の手中に陥つたのであるかと尋ねた。

フィブル・マインド すると、その哀れな男は言つた、ごらんの通り、私は病身なのです、それで、通常一日に一度は「死」が私の家の戸を叩くものですから、家におては決してよいこととは思ひました。そこで、巡禮の生涯にこの身を託することにしました、さうして、私

と私の父が生れた「不定」の市まちからここまで旅をしてまゐりました。肉體の力はすこしもなく、精神の力もない人間ですが、出来ることならば、這つて行くことしか出来なくても一生を巡禮の道に費したいと思つてゐます。道の始に立つてゐる門へまゐりました時、あの場處の主あまじの君は心おきなく待遇もてなして下さいました。私の弱弱しい容貌がいけないとも、私の弱氣ワイケム・マインドがいけないとも言はれないで、旅中入用な品を賜はり、最後まで望をもつやうに、と言つて下さいました。インタープリタアの館やうたまでまゐりました時には、大さう親切に迎へられました。又「困難」の丘は私には困難過ぎると思はれましたので、私はあの方の召使の一人に背負かぶつて登りました。それはもう、私は巡禮たちからずゐぶん勵ましていただきましたよ、尤も、私が止むを得ずやつてゐるやうに、ぐづぐづと行く氣もちになる方はなかつたのです。でも、追ひついて來られる時には、元氣をお出しなさい、と言つて下さいました、氣落ちワイケム・マインドせし者に勵ましを與へるのは彼等の主の御意あきこであると言はれました(テサロニケ前書五・一四)、さうして、その方方の歩調で先へ進まれました。「襲撃の徑みち」に辿りついた時、あの巨人が私の前に立ちはだかつて交戦の用意をしろ、と言ひました。が、情なげないことにはこの通り弱い者ですから、氣つけ薬の方が要るところでした。そこで、彼は追つて來て、私をつかまへました。殺すことはあるまいと思ひ

ました。又私が進んで行かうとしないので、穴窟あなほらの中へ引張り込んだ時にも、必ず生きてかへると思つてゐました。何故なら、暴力に依つて俘囚とりことなつた巡禮は、その主人に對する眞心の忠誠を失はなければ、攝理の掟に依り、敵の手に死ぬるものではないといふことを聞いてゐましたから。掠奪は覺悟してゐました。さうして確かに掠奪せられました。しかし、ごらんの通り、命をとりとめて難を免れました。それに對しては作者としての私の「王」と、手段てんでんとしてのあなた方に御禮を申し上げます。この他の攻撃の矢おもてに立つことも覺悟してゐますが、これだけのことは決心してゐます、すなはち、走れる時には走る、走れない時には歩く、歩けない時には這つて行くといふことです。大體は定まつてゐることを私を愛したまふ者に感謝してゐます。私の道は私の前にあり、私の心は橋なき川の彼方にあるのです、ごらんの通り、唯、弱ワイケム・マインドい心をもつた者でありますけれど。

オネスト　すると、オネスト老人は言つた、あなたは以前巡禮のミスタア、フィアリングといふ人とお近附きではありませんでしたか。

フィーブル・マインド　近附きでしたとも。あの人は「滅亡まうびの市」の北、四度のところにあつた、私の生れたところから同じぐらゐ離れたところにある「愚鈍の町」から來た人です。でも、



私どもは近附きでした、何故なら、本當を申しますと、あの人は私の伯父なのです、父の弟なのです。丈は私よりも少し低うございましたが、私どもの顔色は大さう似てゐます。

オネスト 知つてゐられると思ひました、お二人が御親戚だといふこともありさうなことを思ひます、何故なら、あなたはあの方の白つばい容貌をもつてゐられる、目つきがあの方に似てゐられる、それに言葉遣がよく似てゐられる。

「ファイブル・マインド 私ども兩人を御存知の方は大抵皆さう言はれました、それに、私があの人の中に見とめ得たものは、大部分私自身の中にも發見してゐます。

ガイオ さあさあ、あなた、と善良なガイオは言つた、元氣を出して下さい、あなたは私にとつても私の家にとつても、歓迎する方です、何でも欲しいものは御遠慮なく仰有つて下さい。又、私の僕たちにして貰ひたいと思はれることは、僕たちが快く致しますでせう。

すると、ミスタア、ファイブル・マインドは言つた、これは思も寄らなかつた御好意で、眞暗な雲の中から太陽が輝やき出でるやうです。巨人スレイ・グッドが私をとどめた時、これ以上さきへは行かせないと決心した時、かういふ御好意にあづからせるつもりだつたでせうか。私のポケットを掠奪した後に、わが宿の御亭主ガイオのもとへ行かせるつもりだつたでせうか。

でも、事實はさうなつてゐます。

さて、ミスタア、ファイブル・マインドとガイオがかうして話をしてゐるちやうどその時に或人が駆けつけて来て、戸口をおとづれ、一マイル半ばかり離れたところで巡禮のミスタア、ノウ・ライト「不正氏」といふ人がそのゐるところで雷にうたれて死んだ、といふことを告げた。ファイブル・マインド やれやれ、とミスタア、ファイブル・マインドは言つた、あの人は殺されましたか。あの人は數日前、私がこちらへ来るまでに私に追ひつきまして、私の話對手にならうと言はれました。巨人スレイ・グッドが私を捕へた時にも一緒にゐたのですが、遁足が速かつたので免れたのでした。しかし、あの人は免れて死に就き、私は捕へられて生きてやうに思はれます。

たちどころに殺さむとすと思はるるもの、

しばしばいとも悲しき苦境より救ふ。

その顔は「死」にぞある、かの「攝理」すら、

謙遜る者に、しばしば「命」を遺す。

われは捕へられ、かれは遁げ去りたりき、

俘囚は、死をかれに、命をわれを與へたり。

〔註。最後の行は離解である。「俘囚」を恐ることは死をかれに與へ、「俘囚」に遭ふことは命をわれに與へたといふ意味に解釋する。〕

さて、この頃にマシウとマーシーとは結婚した。また、ガイオはその女メフイービーをマシウの弟ジェイムズに娶はせた。

〔註。これらの結婚が不合理であることは既に述べた通りである。(二〇一頁註参照)。ここには何か本文上の錯誤があつたものと思はれるが、今までのところ、この點を明らかにするものは發見せられてゐない。〕

その後、彼等は十日以上も、ガイオの家に滞在した、彼等の時と季節を巡禮たちの慣なづりに従つて費しながら。

彼等が出發することになつた時、ガイオは彼等のために宴會を開いた、それで、彼等は飲んだり、食べたりして、歡をつくした。いよいよ立ち去るべき時が來たので、ミスタア、グレイト・ハートは勘定書を求めた。しかし、ガイオは彼に告げて、その家では巡禮がその待遇もてなしに對して支拂をする習慣しよんになつてゐないと言つた。彼は一年極めで彼等を宿泊させるのであるが、支拂の方は善きサマリア人から貰ふことにしてゐた、この人は歸つて來る時に、彼等に對する

請求書がどれほどであつても、忠實に支拂をする約束したのである。(ルカ傳一〇・三三―三五)すると、ミスタア、グレイト・ハートは彼に言つた。

グレイト・ハート 『愛する者よ、なんぢは何事に依らず兄弟たちにまた見知らぬ人人になせることを忠實になし、その人人は教會の前にて汝の愛につきて證あかしをなせり。その人人をなんぢにしてなほ敬神の道に従ひてその旅路に發たせなば、汝の行ふところよからん。』(欽定譯聖書 〇ハネ第三書五、六)。

そこで、ガイオは一同と、彼の子供たちと、また特にミスタア、フイーブル・マインドに別れを告げた。彼はまた、この人に道中で飲むものを與へた。

ところが、ミスタア、フイーブル・マインドは彼等が家の戸を出て行く時に、なほあとにぐづぐづしてゐるつもりであるかのやうな様子を見せた。それをミスタア、グレイト・ハートが見つけた時、彼は言つた、さあ、いらつしやい、ミスタア、フイーブル・マインド、どうか私どもと一緒に來て下さい、私があなたの案内者になります、あなたにも他の人ほかたちと同じやうに旅をさせてあげます。

フイーブル・マインド ああ、私は身分相應な道連が欲しいのです、あなた方は皆元氣な、強

壯な方です、が、私は、ごらんの通り弱い者です。

ですから、私は後からまゐることにはなりたいと思ひます、私の多くの弱さのために、私自身にも、あなた方にも、重荷になつてはなりませんから。私は、今も申しましたやうに、弱い、頼りない心をもつた男です、それで、ほかの人には辛抱の出来ることに氣を損ねたり、弱らされたりするだらうと思ひます。私は笑ふことを好まないでせう、派手な衣裝を好まないでせう、無用の質問を好まないでせう。そればかりか、他人が行つてさしつかへのないことに對しても氣を損ねるほど、弱い者なのです。私はまだすべての「眞理」を知つてゐません。まことに無智なキリスト教徒なのです。時時どなたかが「主」を喜ばれるのを聞きますと、私が同じやうにすることが出来ないで、苦しくなります。ちやうど強い人の中の弱い者、或は健康な人の中の病人、或は見下げられたラムブのやうな者です。(ともすれば足を滑らす者はやすらかなる者の思の中にては見下されたるラムブの如し。)(註。欽定譯聖書ヨブ記一二・五。邦譯は全然違つてゐる。)ですから、どうすればいいか分かりません。

グレイト・ハートでも、同人、と、グレイト・ハートは言つた、私は氣の弱い者を勵まし、力の弱き者を扶けることを委任けられてゐます。あなたは何としても私どもと一緒に出かけして下さい。さして、この間ずつと、ガイオの家の戸口にゐたのである。ところが彼等が斯うして談話をし

てゐる最中に、思ひがけもなくミスタア、レディ・トゥ・ホールト「好跛氏」が手に杖をついて來かかつた。この人も亦巡禮に行くところであつた。

ファイブル・マインド すると、ミスタア、ファイブル・マインドはこの人に言つた。おや、どうやつて來なすつた？ 今も今とて身に適つた對手のないことを愚痴してゐたのですよ、だが、あなたは望み通りの方だ。ようこそ、ようこそ、レディ・トゥ・ホールトさん、お互に助けあひませうぜ。

レディ・トゥ・ホールト 喜んでお伴いたしませう、と、對手は言つた、で、ファイブル・マインドさん、斯うして幸にめぐり逢つたのですから、別れるやうなことの無いやうに、私の杖の

フィーブル・マインド いや、御好意には御禮を申しますが、跛足になる前に足を曳きづらうとは思ひません。それはとにかく、いざといふ場合には、犬を禦ぐ足しにはなりません。

レディ・トゥ・ホールト 私でも、私の杖でも、お氣に召すなら、もろともにお役に立てていただきますよ、フィーブル・マインドさん。

かうして、それから彼等は進んで行つた、ミスタア・グレイト・ハートとミスタア、オネストは先登に立ち、クリステイアナとその子供たちが次に行き、ミスタア、フィーブル・マインドとミスタア、レディ・トゥ・ホールトは彼の杖と共に後からついて行つた。すると、ミスタア、オネストが言つた。

オネスト もし、あなた、私どもはいよいよ旅路に上つたことでもありますから、私どもよりも前に巡禮に出かけた或人人の、何か身のためになるやうな話をして下さいませんか。

グレイト・ハート 承知しました。あなた方は昔、クリステアンが「謙遜の谷」でアポロンに出會したことや、また、彼が「死の影の谷」を通り抜けるために難澁したことをお聞きになつたと思ひます。また、フェイスフルがマダム・ウォントンや、アダム・ザ・ファーストや、デイスコンテント、シェイムなどといふ、この路で出逢ふどんな者にも劣らぬ詐偽の多い四人

の悪者どもに惱まされたこともお聞きにならなかつたことはなからうと思ひます。

オネスト そりやもう、さういふ事は皆聞いてゐます。ですが、實際、善良なフェイスフルが最も惱まされたのはシェイムでしたね、しつこい奴でしたからね。

グレイト・ハート さうですよ、あの巡禮がうまく言つたやうに、すべての人の中であいつだけは見當違の名をもつてゐたのですから。

オネスト だが、あなた、クリステアンとフェイスフルがトーカーティヴに出逢つたのは何處ですか。あいつも亦したたか者でした。

グレイト・ハート あれは自惚の強い莫迦者です、それでも多くの人があいつの道に従ひます。オネスト あの男はフェイスフルを欺くところでしたね。

グレイト・ハート さうでした、しかしクリステアンが敏速く相手の真相が分るやうにしてやりました。斯うして彼等はさきを急ぎ、エヴァンジェリストがクリステアンとフェイスフルに逢つて、「虚榮の市」で二人の身に起るべきことを豫言したところへやつて來た。

グレイト・ハート すると、彼等の案内人は言つた。このあたりで、クリステアンとフェイスフルは、彼等が「虚榮の市」でどのやうな困難に出逢ふかといふことを豫言して聞かせた、エ

ヴァンジェリストに逢ひました。

オネスト　そりや本當ですか！　あれはむつかしい講釋だつたと思ひます。

グレイト・ハート　その通りでした、が、それと共に二人を勵ましてやりました。しかし、私どもは彼等について一體何を言つてゐるのでせう？　彼等は獅子のやうな男の二人でした。彼等は燒石のやうに堅いおもてをふり向けました。彼等が裁判官の前に立つた時、どのやうに豪膽であつたかといふことを覚えてゐられませんか。

オネスト　さやう、フェイスフルは立派に殉教の死を遂げましたね。

グレイト・ハート　さうでした、また同じやうに立派な事がそれから出て來ました、あの話の言ふところに依ると、ホウプフルやその他の人たちが、あの人の死に依つて心機一轉したと申しますから。

グレイト・ハート　クリスチアーンが「虚榮の市」を通り抜けてから後に出逢つたすべての者の中では誰よりもバイ・エンツといふのが大者でした。

オネスト　バイ・エンツですつて、そりや何者ですか。

グレイト・ハート　大した大者です、正真正銘の偽善者です。いつも世間の赴くままにどの方

向へでも、信仰の篤い者でありたいと思つてゐるのですが、實に抜け目がなくて、そのために損をしたり、難に遭つたりするやうなことは斷じてしたくないといふ奴です。彼はあらゆる新奇な場合に對處する爲の宗教の様式をもつてゐました、それに、その妻がまた彼と同じやうに巧妙にやつてのけるのです。彼は説から説へと移つたり、變つたりして行くのでした、その上、さうすることを辯護するのです。しかし、私の知り得た限りでは彼の射利を射ふことに依つて不幸な終を遂げました、また、その子供たちの中には一人として本當に神を畏れる人人に尊重せられた者はありません。

さて、この頃には「虚榮」の市の見えるところへ來てゐた、そこは「虚榮の市」が立つてゐた。それで、その市にこんなに近いところへ來てゐるといふことが分つた時、彼等はどういふ風にしてその市を通るのがいいかといふことを互に語りあひ、或者が一つの意見を言ふと、また他の者は他の意見を言つた。終に案内人のミスタア、グレイト・ハートが言つた。御承知の通り、私は屢々この市を通つて行く巡禮たちの案内人をやつたことがあります、ところで、私は古い御弟子でクプロの人、マナソンといふ者を知つてゐますが、その人の宅へ泊めて貰へると思ひます。(註。「使徒行傳」二一・一六に「カイザリアに居る弟子も數人、ともに行き、我らの宿らんとする

「タプロ人マナソンといふ舊き弟子のもとに案内したり。」とある。あなた方がよいと思はれるなら、と彼は言つた、そこへ立ち寄ることに致しませう。

賛成、とオネスト老人が言つた。賛成、とクリステイアナが言つた。賛成、とミスタア、フイーブル・マインドが言つた。それで、彼等は皆さう言つた。さて、諸君は彼等が市の外廓に達した頃には夕暮であつたと思つて下さらなければならぬ。しかし、グレイト・ハートはその老人の家に行く道を知つてゐた。で、そこへ彼等は行つた。それから彼は門を訪れた、すると、中にゐる老人はそれを聞くと直ちに彼の言葉を聞きわけた。そこで、彼は門を開いた、で、一同中に入つて行つた。すると、宿の主人、マナソンは言つた、今日ほどの邊から來られましたか。そこで彼等は言つた、私どもの友人ガイオの家から、と。そりや大變だ、と彼は言つた、ずいぶん歩かれましたな、さぞお疲れでせう、坐つて下さい。そこで、彼等は坐つた。

グレイト・ハート すると、彼等の嚮導は言つた、さあ、皆さん、如何です？ 私の友人は皆さんを歓迎してくれますよ。

マナソン 私も、とマナソンは言つた、歓迎致しますよ、で、何でも御入用なものは唯仰有つて下さい、出来るだけのことをして間に合はせますから。

オネスト 私どもが暫く前から大いに入用としたのは泊の宿と愉快な一座です、で、今、私どもはその二つを共にもちたいと思つてゐます。

マナソン 泊の宿はごらんの通り、愉快な一座は試みに現出させて見ることに致しませう。グレイト・ハート それでは、とミスタア、グレイト・ハートは言つた、この巡禮たちを宿所へ案内して下さいませうか。

マナソン 長まりました、とマナソンは言つた。で、彼は彼等をそれぞれの部屋へ連れて行つた。それからまた、憩に就く時が来るまでは一緒に集まつて食事をする事の出来る、大さう立派な食堂を見せた。

さて、彼等がその部屋に到着き、多少旅の疲れを回復した後、ミスタア、オネストは宿の主人に、この市には善人の用意がありますか、と尋ねた。

マナソン すこしはあります、實際、その反対の方の者どもに較べたならば、ほんのすこしなのですから。

オネスト しかし、どうすればその中の誰方かにお目にかかれませう？ 巡禮の途上にある者にとつて善人を見るといふことは海の上で帆船に乗つてゐる者にとつての月や星の出現のや

うなものですから。

すると、マナソンは足でトントンと床を鳴らした、と、その女のグレイス〔恵〕が出て来た。そこで、彼は言った。グレイス、お前ね、私のお友だちのミスタア、コントライト、ミスタア、ホウリマン、ミスタア、ラヴ・セイント、ミスタア、デア・ソットライ「悔悛氏、神人氏、愛聖氏、不敬虚言氏」とミスタア・ベニテント「悔罪氏」のところへ行つて今晚皆様にお目にかかりたいといふお友だちが一人二人お出でになつてゐます、と申し上げておくれ。

そこで、グレイスは呼びに行き、彼等はやつて来た。で、挨拶が交はされた後、彼等はともどもに食卓に就いた。

すると、宿の主人ミスタア、マナソンは言った、御近所の皆さん、ごらんの通り、私は、宅へお出でになつた旅のお客さまをお迎へしてゐます、この方は巡禮で、遠いところから来られ、シオンの山へ行かれるところです。しかし、と彼は言った、この方を誰だと思はれますか、と指でクリステイアナを指し示しながら。私どもの市で、その同人フェイスフルと共にあのやうな言語道斷の取扱を受けられたクリスチアンの奥さん、クリステイアナですよ。それを聞いて、彼等は吃驚した、グレイスが私どもを呼びに来た時にはまさかクリステイアナに逢はうと

は思ひませんでした、ですから、これはまことによろこばしい驚きです、と言ひながら。それから、彼女の安泰を尋ね、また、この若い方は御主人の令息たちですか、と尋ねた。で、彼女がさうですと告げた時、彼等は言った、あなた方がお慕ひになり、お仕へになる王さまが、あなた方をお父さまのやうにして下さいますやうに、また、お父さまが「平和」の裡にゐられるところへ連れて行つて下さいますやうに、祈りますよ、と。

オネスト　すると、ミスタア、オネストは（一同が席に就いた時）ミスタア、コントライトとその他の人人に尋ねた、現在彼等の市はどういふ状態になつてゐますか。

コントライト　市の立つ頃にすむぶん忙しくしてゐることは申すまでもありません。煩勞の多い境涯にあつて私どもの心情や精神を少しでも秩序のある状態におくことは困難です。かういふ場處に住んで、私どもが對手にしてゐるやうな手を對手にしなければならぬ者は、一日のあらゆる瞬間に油断をしないやうに注意するための誠が必要ですよ。

オネスト　だが、御近所の方はおだやかですか、その點は如何です？

コントライト　今は先ごろよりもよほどおとなしくなりました。クリスチアンとフェイスフルが私ども市で遭遇せられたことは御存知ですが、最近、遙かにおだやかにしてゐると思ひ

ますよ。フェイスフルの血が今に至るまで彼等の上に重荷を課してゐるやうです、といふのは、あの人を焼いて以来、あれ以上、人を焼くことを恥ぢてゐますから、あの頃には街を行くのも恐ろしかつたものですが、今では顔を出すことが出来ます。當時は信徒プロテスタント（註。「第一部」六九頁註参照。）といふ名が嫌はれたものでしたが、今では、特に私どもの市の或區域では（御存知のやうに私どもの市は廣いのですから）宗教は尊敬すべきものだと思へられてゐます。その時、ミスタア、コントライトは彼等に言つた、あなた方の巡禮の道中は如何でした？この國の風當りはどういふ風でした？

オネスト 族をする人に起るやうなことが私どもの上にも起りました。私どもの旅路には平穩な時もあり、不快な時もあり、困難な時もあり、氣樂な時もありました。確かな見込をもつたことは滅多にありません、風は後から吹くものとは限らないし、道で逢ふ者が誰も皆味方であるといふわけでもないのです。今までにも多少際疾さやかひい障礙に出會であひしました、まだこのあとにどんなものがあるか分りませんが、が、大體のところ、あの昔から話されてゐる、「善人は苦勞しなければならぬ」といふことは本當だと思ひます。

コントライト 障礙と仰有いますが、どんな障礙にお逢ひでした？

オネスト いや、その事なら、私どもの嚮導オアシス、ミスタア、グレイト・ハートに伺つて下さい、この方が一番よくその話をする事が出来ます。

グレイト・ハート 私どもは既に二度も三度も、襲はれたのですよ。先づ第一にクリステイアナとその子供たちが二人の兇漢ならず者に襲はれ、命を奪られるかと思つたのでした。私どもは巨人ブラディマン、巨人モール、巨人スレイ・グッドに襲はれました。本當のところ、この最後の者は私どもが襲はれたといふよりも私どもから襲つたのでした。それはかういふわけでした、私どもが『我と全教會の家主イブガイオ』（ロマ書一六・二三）の家にしばらく留まつた後、或時武器をとり、さういふ風にして巡禮に敵する者に出逢ふことが出来ないか、ひとつ行つて見ようといふ氣になりました、（といふのは、そのあたりに大分ひどい奴があるといふことを聞いたものですから）ところが、ガイオはその地方に住んでゐたのですから、彼の巢窟すみかを私よりもよく知つてゐました、で、私どもは探り、探つて、たうとう、彼の岩窟いほの口を見つけました、そこで悦びましてね、元氣を奮ひ起したのです。で、その穴窟あなへ近づいて行きますと、どうでせう、私どもがそこへ行つた時、彼はお氣の毒にも、ミスタア、フィーブル・マインドを無理無態に引曳り込んでゐて、今やまさに息の根を止めようとしてゐました。が、私どもを見た時、また、



一つの餌食を捕へたと想ひ、このお氣の毒な方をその穴窟に残して出て來ました。そこで、私も激闘をおつ始め、彼は奮迅の勢で猛り狂ひました。が、結局、地にうち倒され、首を刎ねられ、路傍にかかけられて、向後ああいふ非道を行ふやうな者の見せしめになりました。私の申し上げることが本當だといふことは、獅子の口から救ひ出された小羊のやうな、その人自身ここにゐて確證して下さいます。

フィーブル・マインド すると、ミスタア、フィーブル・マインドは言つた、このことは眞實で、それが私には災難にもなり、慰安にもなりました。彼が、今が今でも私の骨をつつくぞと脅しつけた時には災難になり、ミスタア、グレイト・ハートとそのお友だちが、武器をもつて私を救ひ出すために、あのやうに近く進んで來られるのを見た時には慰安になりました。

ホウリ・マン すると、ミスタア、ホウリ・マンは言つた、巡禮の旅に出かける者にとつて必要な二つのものがあります、勇氣と汚のない生活です。勇氣をもたないならば、決してその道を續けて行くことは出來ません、また、生活が自墮落であれば巡禮の名といふものからしてむさくるしい臭を發散せしめるでせう。

ラヴ・セイント すると、ミスタア、ラヴ・セイントは言つた、かういふ注意があなた方の間

では必要でないことを望みます。が、實のところ、旅路を行く者の中には、地にては見知らぬ者または巡禮〔註。欽定譯聖書へブル書一・一三〕であるよりも寧ろ巡禮の旅に對して見知らぬ者であることを公言する者が多いのです。

デア・ノット・ライ すると、ミスタア、デア・ノット・ライが言つた、その通りです、彼等は巡禮の衣をも、また巡禮の勇氣をも、もつてゐません。彼等は眞直に行かず、足はすつかり歪ちくれてゐます。一方の靴は内側へ、一方の靴は外側へ行き、また、彼等の長靴下は後の方の糸が切れてゐます。こちらに襪襦が下つてゐるかと思へば、こちらには裂けたところがある、といふやうなわけで、それが彼等の「主」の汚名を招くことになるのです。

ベニテント かういふことで以て、とミスタア、ベニテントは言つた、彼等はなやまされなければならぬのです、また、この道がさういふ汚點と瑕〔註。ペテロ後書二・一三〕から潔められるまでは、巡禮は援けられた神恩に浴することも出來ず、彼等の天路歷程はその願ふやうなものにはならないのです。

かうして、話しながら、また時を過しながら、坐つてゐるうちに、夕餐が食卓の上に並べられたので、彼等はそこへ行き、その疲れた身體の氣力を回復した。そこで憩に就いた。さて、

彼等はこの市のミスタア、マナソンの家に大分長い間滞在したのであるが、この人は、時が経つにつれて、女グレイスをクリステイアナの息子サミュエルに、また、女マーサをジョウゼフに嫁がせた。

今も言つたやうに、彼等がここに滞在した時は長かつた。(その頃は以前のやうではなかつたから。)それで、巡禮たちはその市の善良な人人の多くの者と近しくするやうになり、その人のために出来るだけの奉仕をした。マーシーは、いつもの慣で、貧しい人人のために大さう骨を折り、それに依つて彼等は衣食の救を得て、ありがたく思つた、で、彼女はそこではその信者の道の花ともいふべきものであつた。それから、グレイス、フィービー、及びマーサに就いて本當のことを言ふと、彼等は皆、大さう善良な性質の者であり、彼等の持場に於いて多くの善事を行つた。彼等は又、誰も皆、子澤山であつた、それで、前にも言つたやうに、クリスチアンの名は世界に存続するやうに思はれた。

彼等がここに留まつてゐる間に、一種の怪物が森から出て、この市の多勢の人を殺した。又彼等の娘たちを攫つて行つて、その怪物の仔どもに乳を吸はせるのであつた。ところがこの市の者は誰一人としてこの怪物に立ち向ふことをすら敢へてするものはなく、彼が來るといふ噂

を聞いた時には皆遁げてしまふのであつた。

この怪物は地上の如何なる獣にも似てゐなかつた。身體は巨龍のやうであり、それには七つの頭と十の角があつた。「ヨハネ黙示録一七・三」。それは子供たちを荒らし廻つた、が、それでも一人の女に支配せられてゐた。「註。ヨハネ黙示録一七・三—六参照」。この怪物は人人に條件を持ち出した、それで、靈魂よりも生命の方を大切にするやうな者はそれらの條件を受け容れた。かうして彼等は屈服した。

さて、このミスタア、グレイト・ハートは、ミスタア、マナソンの家に巡禮たちを訪ねて來たこの人人と共に、この獣のところへ出かけて行つて戦を交へるといふ契約を結んだ、といふのは、この市の人人をかういふ呑噬飽くなき大蛇の足と口から救ふことが出来るかも知れないと思つたからで。

そこで、ミスタア、グレイト・ハート、ミスタア、コントライト、ミスタア、ホウリ・マン、ミスタア、デア・ノット・ライ及びミスタア、ベニテントは、彼等の武器をもつて彼に會戦する爲に出かけた。ところが、この怪物は當初極めて横柄であり、これらの敵を大いなる侮蔑を以て見下したが、元來剛膽な武人であつたこの人人は、彼を散散に打ち惱まして、終に退却させて

しまった。そこでまた、ミスタア、マナソンの家に引き上げた。

この怪物は、これは申し上げて置かなければならないのであるが、現れて来て、市の子供らに手を下す、彼の特別な時季をもつてゐた。またさういふ時季にこれらの勇敢な人士は彼を監視してゐて、絶えず引きつづいて襲撃を加へたのであつた。時が経つにつれ、彼は痛手を負うたばかりでなく、跛足になつたやうな始末。また、以前のやうには市人の子供たちを荒し廻らなくなつた。また、或人人には、この獣が彼の受けた痛手に依つて死ぬるだらうといふことが、本當に信ぜられてゐる。

このことが、それ故に、ミスタア、グレイト・ハートとその仲間をこの市の大さう有名なものにしたので、物事の分らない人人の多くの者が、それでも猶、彼等に對する畏敬と尊敬の念を抱いた。だから、巡禮たちがここであまり害を受けなかつたのもかういふ理由があつたからである。尤も、土龍以上に物が見えず、獣以上の理解力もない、幾人かの者もあつて、これらはこの人人に尊敬の念をも抱かず、また、彼等の武勇と冒険に心をとめなかつた。

さて、愈々巡禮たちがその道に上る時が迫つて来た、それで、彼等は旅路の支度をした。彼等は友を呼びにやつた、その人人と相談した、互の身を彼等の「君」に委ねるための時を取つ

ておいた、また、持ちあはせた物で弱い者や強い者に女たちや男たちに適したものを持つて来る人があり、かうして、道中入用なものをたくさんに背負ひ込ませた。(使徒行傳二八・一〇)。

そこで、彼等はその道に進んだ、彼等の友は程よいところまで見送つて来た、彼等は再び互の身を「王」の保護に委ねて、訣別した。

そこで、巡禮たちの仲間のものは先を急ぎ、ミスタア、グレイト・ハートは先登に立つた。ところで、女たちや子供たちは身體が弱いから、どうかかうか耐へ得るやうにして行くことを餘儀なくせられたが、これに依つてミスタア、レディ・トゥ・ホールト、ミスタア、フィープル、マインドは子供たちと愈々心一つにするやうになつた。

市人から立ち去つた時、また、友にわかれを告げた時、彼等は早速フェイスフルが死に處せられた場處へ行つた。で、そこに彼等は立ちとどまり、彼をしてあのやうによくその十字架を負ふことを得せしめたまふた者に感謝した。それも、今、彼のやうな男らしい殉教に依つて、恩恵を得てゐることが分つたから尙更のことであつた。

そこで、この後、彼等はよほど先まで進んで行つた、クリスチアンとフェイスフルのことや、また、フェイスフルが死んだ後にハウプフルがクリスチアンの道連になつたことを話しながら、

今や彼等はルーカー「陋益」の丘へさしかかった、そこには銀坑があつて、それは、デマス  
を巡禮の旅から立ち去らしめ、その中に、或人人の考へるところでは、パイ・エンツは落ちて  
滅び果てたのである。(第一部二〇二頁参照)。しかし、彼等がルーカーの丘に向ひ合つて立つて  
ゐる古い記念碑、すなはち、ソドムとその惡臭紛紛たる湖水の見えるところにも立つたことの  
ある鹽の柱のあるところへ來た時、さきにクリスチアンがさう思つたやうに、智識はあり、才  
智は成熟した人人でありながら、彼等がここで道から逸れるといふほど目先の見えぬ者であ  
つたことを不思議に思つた。唯、よく考へ直して見ると、人の本性といふものは他人が遭遇し  
た災害には動かされないもので、特にその眺めるところのものに愚かな目を惹きつける價值が  
あるならば、さうである、と思つた。

私は今、彼等が進んで歡樂山のこなたにある川のところにさしかかるのを見た。(第一部二〇  
九頁参照)。立派な樹が兩側に生えて居り、その葉は、内服したならば、食傷に效くものであり、  
そこでは牧草の原が年中緑であつて、そこに彼等は安らかに身を横たへることの出来る、あの  
川である。(詩篇二三)。

川のほとりの牧草の原には羊の小舎と欄、あの小羊、巡禮の旅にある女たちの赤兒どもを養

ひ育てるために建てられた家があつた。また、そこには思ひ遣ることが出来る、それらの小羊  
をその腕に抱き寄せることが出来る、その懐中に入れてたづさへ、また、幼いものをやさしく  
導くことの出来る、一人の人が、それらのものを預かつてゐた。(ヘブル書五・二、イザヤ書四〇・  
一一)。

さて、クリステイアナはその四人の女たちに勤めて、その小さい者をこの人に預けさせた。  
この水のほとりで住家をあたへられ、かくまはれ、乳を授けられ、また養はれるやうに、又來  
るべき時にその一人でも缺けるものがないやうに。この人は、若し彼等のどの一人でも迷つた  
り、道を踏みはずしたりすれば、伴れ戻すであらう、彼はまた、傷つけられた者を裹み、病め  
る者を強くするであらう、(エゼキエル書三四・一一―一六)。ここでは食べものと飲みものと着も  
のに決して事を缺かないであらう、ここでは盗人や追剝から守られるであらう、何故なら、こ  
の人は彼を信頼して委ねられた者の一人が失はれるよりもさきに死ぬるのである。(エレミヤ記  
二三・四)。それに、ここでは必ずよい榮養と訓誡を與へられるであらう。また、正しい道に歩  
むことを教へられるであらう、それは、あなた方も知つてゐるやうに、おろそかならぬ神恩で  
ある。ここにはまた、あなた方の見るやうに、さはやかな水があり、氣もちのいい牧草の原が

あり、綺麗な花があり、さまざまの樹があり、健全な果をつけるものがあつて、その果はマシウが食べたベルゼブルの園から壁越しに落ちたやうなものではなく、健康のないところには健康を招来し、あるところではそれを持ち續かせ、増し加へるところの果である、と。

そこで彼等は快くその小さいものをこの人に委ねることに同意した。また、彼等にさうするのための奨励になつたのは、これが皆「王」の支辨に依つて賄はれることになつて居り、その結果、幼児と孤兒のための養育院のやうなものであつたといふことである。

さて、彼等は先を急いだ。さうして、「脇道の原」に、クリスチアンとハウプフルが巨人ディスペドアに捕へられて「疑惑の城」に投り込まれた時、二人がその上を越えて行つた踏段にさしかかつた時、彼等は腰を下して、この際、どういふことを行ふのが上策であるか、といふのは、今や彼等はこの通り強くなつてゐて、案内人にはミスタア、グレイト・ハートのやうな人もゐるのであるから、これより先へ行く前に、巨人に手を下し、その城をとり壊し、若しその中に巡禮でもゐるならば、その人たちを釋放するのが最も策を得たものではないか、といふことを談合した。そこで、或者が一つの説を言ふと、他の者がその反對の説を言つた。或者は不淨の地に入つて行くのは正しいことであるか、といふことを問題にした。他の者は彼等の目的が善

ければさしつかへはなからうと言つた、が、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、最後に提出せられた提案は普遍的に眞理ではあり得ないのですが、しかし、私は罪に抵抗し、惡にうち克ち、信仰の善き戦闘を戦ふやうに〔註。テモテ前書六・一二〕、との命令を受けてゐます、で、若し巨人ディスペアと闘はないとすれば、一體誰を相手にその善き戦闘を戦ふことが出来ませう？ ですから、私は彼の生命を奪ひ、「疑惑の城」をとり壊すことをやつて見ようと思ひます。そこで彼は言つた、私と共に行く人がありますか、すると、オネスト老人は言つた、私が行きます。われわれも行きますよ、と、クリステイアナの四人の息子、マシウ、サミニエル、ジェイムズ及びジョウゼフは言つた、彼等は若者であり、又、強壯であつたから。（ヨハネ第一書二・一三、一四）。そこでこの人人は女どもを、又ミスタア、フィープル、マインドと杖をもつたミスタア、レディ・トゥ・ホールトを、歸つて来るまでの彼等女どもの守護者として道に残した。といふのは、その場處では、巨人ディスペアはこれほど近くに住んでゐたけれども、道さへ守つてゐれば、ちいさい童子でも彼等を導くことが出来たのである。（イザヤ書一一・六）。そこで、ミスタア、グレイト・ハートとオネスト老人と四人の若者は巨人ディスペアを探しに「疑惑の城」へ出かけた。城門に辿りついた時、彼等はただならぬ音を立ててうち叩き、入

城を求めた。それを聞いて老いたる巨人は門に出て来た、又、その妻のディフィデンスも従いて来た。そこで、彼は言った、かうして大膽にも巨人デイスベアの邪魔をする奴は誰だ、何者だ？ ミスタア、グレイト・ハートは答へた、私だ、巡禮をそのふるさとへ案内する、天國の王の案内人の一人、グレイト・ハートだ、私の入城のために門を開くことを汝に要求するのだ。又、汝は戦闘の用意をしろ、私は汝の首を奪ひ、「疑惑の城」をとり壊すために来たのだから。さて、巨人デイスベアは、巨人であるが故に、如何なる人間も彼にうち克つことは出来な  
いと思つた。更にまた、今まで自分は天使を征服して来た、グレイト・ハートなどを恐れることがあらうか、と思つた。そこで彼は甲冑に身を固めて出て来た。その頭には鋼鐵の帽子を被り、火の胸當がその身體を取巻いてゐた、又、彼は鐵の靴を穿き、大きな棍棒を携へて出て来た。そこで、これら六人の人は彼にうちかかり、前後から攻め立てた。又、女巨人ディフィデンスが彼を助ける爲に、やつて来た時、老いたるミスタア、オネストはこれを一刀の下に斬り棄てた。それから、彼等は必死と闘つた、それで、巨人は地にうち倒された、が、死ぬることを大さう嫌がつた。彼はひどくあがいた、諺に言ふ、猫とおなじやうに幾度も生き返つた。「註。猫は死んでも九度生き返へる、といふ諺がある。」が、ミスタア、グレイト・ハートはその死神であつ

た、彼はその頭を肩から斬り放つまで、そのままにしておかなかつたから。

それから、彼等は「疑惑の城」をとり壊しにかかつた、それはもとより、巨人デイスベアが死んだのであるから、容易に行ふことが出来たのである。それを破壊するには七日かかつた。その中では、巡禮のひとりで、殆んど餓死なんばかりになつてゐたミスタア、デイスボンデンシー〔落膽氏〕と、その女マツチ・アフレイド〔恐懼〕といふ者を見つけた。この二人は生きてままで救はれた。が、城の中庭のそこに横たはつてゐた死骸を見たり、土牢が死人の骨に満ちてゐるやうすを見たならば、諸君はあつと驚かれたであらう。

ミスタア、グレイト・ハートとその仲間がこの功名を成し遂げた時、彼等はミスタア、デイスボンデンシーとその女マツチ・アフレイドを保護することにした、「疑惑の城」ではあの暴君、巨人デイスベアの俘虜であつたが、心の清い者であつたから。そこで、今も言ふ通り、彼等は巨人の首をひつ提げ、(その身體は石を推みかさねたものの下に埋めたので、)道へ、また、その仲間のところへ行き、彼等の行つたことを示した。ところが、フィーブル・マインドとレディ・トゥ・ハウルトは本當にそれが巨人デイスベアの首であるのを見た時、大さう浮かれてはしやぎ出した。ここにまた、クリステリアナは必要とあらばヴァイアル〔註。一種の絃樂器〕を

弾くことが出来た、またその女マーシーはリュート〔註。これも一種の絃楽器〕を弾くことが出来た。それで、この二人がかういふ風に浮浮した氣もちになつてゐたので、彼女は二人のためにひとつの練習曲を奏でた。それで、レディ・トゥ・ホルトは踊りたくなつた。で、彼はその名をマツチ・アフレイドといふ〔註。ここでも作者は既にマツチ・アフレイドの名を述べたことを忘れてゐる。〕デイスボンデンシーの女の手をとり、踊をするために道の中へ入つて行つた。手に一方の杖杖をもたなければ踊れなかつたのは事實であるが、しかし、足拍子たくみに踊つたことは私が保證する。娘も亦、賞めておかなければならぬ、この音楽にうつくしく調子を合はせたのであるから。

ミスタア、デイスボンデンシーはどうであつたかといふに、音楽は大して興味のあるものではなく、踊るよりも寧ろ食べる方に心が傾いてゐた、といふのは、この人は殆んど餓死をしさうになつてゐたからである、それで、クリステイアナは當座の饑を凌ぐために酒壘の中のもの少し興へ、それから何か食べるためのものを拵へてやつた。で、程なく老紳士は我に立ち返り、立派に元氣を回復し始めた。

さて、私が夢の中で見てゐると、このすべてのことが終つた時、ミスタア、グレイト・ハートは巨人デイスベアの首をとつて、それを、クリスチアンがその領内へ入ることに氣をつけるやうにと、後に來る巡禮たちの警戒のために建てたあの柱にちやうど向き合つた、大通の傍の竿の上に据ゑつけた。

それからその下の大理石の上に、この次のやうな詩を書いた。

これはその名のみにて、さいつころ、  
巡禮を恐れしめたる者の首なり。

その城は落ちたり、妻のデイフィデンスは

健氣なるマスタア、グレイト・ハート、命を奪へり。

デイスボンデンシーとその女、マツチ・アフレイド、

グレイト・ハートはまた彼等のために男を立てたり。

これをしも疑ふ者は、唯、目をあげて、

この上を見なば、疑念を晴らすべし。

この首はまた、恐ちなやむ蠢者どもの踊る時、

示すなり、恐怖より彼等の救はれたるを。

これらの人人がこのやうに勇敢に身を提して「疑惑の城」を襲ひ、また巨人ディスペリアを殺してしまつた時、彼等は前進して、歡樂山へさしかかるまで歩いて行つた、そこは、クリスチアンとホウプフルがその場處にあるさまさまのもので氣力を回復したところである。彼等はそこにある羊飼たちと近づきになり、その人たちは前にクリスチアンに對してしたやうに、彼等をよろこんで歡樂山に迎へた。

ところで、羊飼たちはこんな多勢の行列がミスタア、グレイト・ハートに従ふのを見て、(彼とはよく知り合つた仲であつたから、) 彼等は彼に言つた、やあ、多勢のお仲間を連れて來られましたな、一體何處でこのすべての方を見つられましたか？

すると、ミスタア、グレイト・ハートは答へた、

先づここにクリスティアナとその従者あり、

子と嫁と、北斗の如く極を指し、

羅針にて罪ゆ神恩へ舵をとる、

さもなくば、彼等はここにあることあらじ、

次にまた巡禮に來しおきなオネスト、

ここにあり、まごころはわれの請合ふ

レディ・トウ・ホルト、フイーブル・マインドはた然り、

この人も残さるることをいとひき。

善人のディスポンデンシーは後より來る、

その女マツチ・アフレイドはた然り。

款待をここに得べきか、或は先へ

行くべきか。頼むべきものを教へよ。

すると、羊飼たちは言つた、これは愉快なお仲間だ。歓迎致しますよ、私どもは強い者にも弱い者にも慰安をもつてゐますが、私どもの王さまはこれらの者のいと小さき者にしたことに目をつけてゐられます(マタイ傳二五・四〇)、ですから病弱は私どもの款待に對する蹉跌の石であつてはならないのです。

そこで、彼等を宮殿の戸口へ連れて行き、彼等に向つて言つた、お入りなさい、ミスタア、フイーブル・マインド、お入りなさい、ミスタア、レディ・トウ・ホルト、お入りなさい、ミスタア、ディスポンデンシー、またその女さんのミストレス、マツチ・アフレイド。「註。この場合のミス



トレス或はミセスは「夫人」といふではなく、未婚の婦人にも用ゐた尊稱で、「マツチナフレイドさん」といふほどの意。」この人たちをミスタア、グレイト・ハート、と、羊飼たちは嚮導に言つた、私どもは名ざして呼び出します、特に後退をしかねない人達ですから。しかし、あなたとその他の強い人達は、あなた方のいつもの御自由に任せます。すると、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、この日、私は神恩があなたがたの顔に輝いてゐること、またあなた方が眞に「主の羊飼たち」であることが分りました。あなた方はこれらの病弱な者を脇と肩とをもて押し出す（エセキエル書三四・二一）やうなことをせず、却つて、あなた方のなさるべきであるやうに、宮殿への彼等の道に花を撒かれたのですから。

そこで、氣の弱い者や身體の弱い者が入つて行き、ミスタア、グレイト・ハートとその他の者はあとに従つた。また彼等が席についた時、羊飼たちは最も弱い人人に言つた、何かお望みになるものがありますか、と彼等は言つた、ここでは一切のものが無法な者どもの警戒になると同様に弱い方々の扶助となるやうに取計はれなければならないのです。

そこで、彼等はこの人人のために、消化れやすく、口に楽しく、また栄養になるもので、宴會を開いた。それをお馳走になつた上で、彼等はそれぞれ、その部屋で憩につくために退いた。

朝になつた時、山は高く、その日は晴れ渡つてゐたから、また、巡禮が立ち去る前に二三の珍らしいものを見せるのがこの羊飼たちの風習であつたから、彼等が身支度をして、腹拵へが出來た後、羊飼たちは彼等を原へ伴れて行つて、先づさきにクリスチアンに見せたものをこの人に見せた。

それから或新しい場處へ伴れて行つた。その最初のものは「驚異の山」で、そこから眺めると、遠いところに一人の人が言葉で丘をひつくり返してゐるのを見た。すると、彼等は羊飼たちに、あれはどういふことですか、と尋ねた。そこで、羊飼たちは彼等に告げて、あの人は『天路歷程』の第一部の中でお讀みになつた、あのグレイト・グレイスの息子です、と言つた、（第一部二三六頁参照）。また、彼があすここに置かれてゐるのは巡禮たちにその遭遇するどのやうな困難でも信仰に依つて信じ倒す、すなはち、ひつくり返すことを教へるためです。（マルコ傳一・二三、二四）すると、ミスタア、グレイト・ハートは言つた、知つてゐます、多くの人に立ちまされた人です。

それから、彼等は「清淨の山」といふ今一つの場處に伴れて行つた。そこでは全身白衣を纏うた一人のひと、絶えずこの人たちに泥を投げてゐる、プレジューデイス（偏見氏）、イル・ウイ

ル「悪意氏」といふ二人の男を見た。ところが、どうだらう、彼に投げかけるものはやがてまた盡く落ち去り、その衣はそれへ泥が投げられなかつたやうに潔らかに見えるのであつた。すると、巡禮の一人が言つた、これはどういふことですか。羊飼たちは答へた、これはゴツドリマン「信心氏」といふ人で、その衣はその生涯の清淨を示したものです。ところで、彼に泥を投げる者は彼の善行を憎むものなのですが、ごらんの通り、泥は彼の着物にくつつかないのです、この世の中で眞に清淨な生涯を送る者も亦この通りになります。かういふ人人を泥で汚さうとする者は誰も皆勞して效なき努力をするのです、といふのは、暫の時の過ぎ去つた頃に、神は彼等の清淨を光のやうに、彼等の義を眞晝のやうに照り出させて下さいます。それから彼等はこの人人を伴れて行つて「仁愛の山」といふところへ案内し、そこでは布地の一束を前においた人を見せた、その中からこの人は彼の周圍に立つてゐる貧しい人人のための外衣や着物を切りとつた。が、その布地の束或は反物はそのために少しも尠くはならなかつた。すると、人人は言つた、これはどういふことでせうか。これはね、と羊飼たちは言つた、その勞働を貧しい者に與へたいと思ふ心をもつた者は決して資力を缺かないこととお見せするためのものですよ。人を潤ほす者はまた潤ほひを受く。「註。箴言一一・二五」。孀婦が豫言者に與

へたパンは決してその桶の中のものもを尠くさせるやうなことにはなりませんでした。「註。列王紀略上一七・八一—一五参照。「豫言者」はエリヤである」。

彼等はまたフル「愚氏」といふものとウォントワイト「缺智氏」といふ者がエティオピア人「註。黑人」を白くしやうといふ意圖で、洗つてゐるところへ伴れて行つたが、この二人が洗へば洗ふほど彼は黒くなるのであつた。人人は、そこで、羊飼たちに、それはどういふことであるか、と尋ねた。そこで、彼等は告げた、罪の深い者も亦この通りです、と言ひながら。かういふものに善い名を得させるために用ゐられたすべての手段は結局彼をもつと嫌はしいものとするやうなことになります。パリサイの徒でもその通りでした、また、すべての偽善者でもかういふことになります。

すると、マシウの妻マーシーはその母のクリステイアナに言つた、お母さん、お母さん、私は出来ることならば、あの通常地獄への傍道と稱へられてゐる、丘の中の坑を見たいと思ひます。(第一部二二九頁参照)そこで、その母はその心にあることを洩らした。そこで、彼等はあの戸のところへ行つた。それは丘腹にあつた、で、彼等はそれを開き、マーシーに暫く耳を澄ましてゐるやうに、と告げた。そこで、彼女は耳を澄ました、さうして或者が、足を捉へて平和

と命の道より引戻す私の父が誼はしい、と言つてゐるのを聞いた。また、他の者は言つた、あ、私の命を救ふため、私の靈魂を失ふまへにすたすたに引裂いて貰ひたかつた、と。また、他の者は言つた、もう一度生き返るやうなことがあつたならば、どんなに己を矯めても、この場處には來ないやうにするのだがなあ、と。するとこの若い女の足の下で、大地が恐怖に依つて呻き、恐ろしい戦ひのやうになつた。それで、彼女は白い顔をした、さうして震へながら立ち去つた、この場處から救はれた男でも女でも、幸福です、と言ひながら。

さて、羊飼たちがすべてこれらのものを見た時、人人を宮殿に伴れて歸り、その家の待遇で彼等をいたはつた。しかし、マーシーは若い、妊娠の女であつたので、そこで見た或物が欲しくてたまらなくなつた、が、それを求めることを恥ぢた。(註。妊娠は一寸したものを無性に欲しがるといふ俗信がある)。姑は、そこで、氣分でも悪いのか、と尋ねた、彼女は氣分のよくない者のやうな顔をしてゐたから。すると、マーシーは言つた、食堂に鏡が懸つてゐます、あれから心を引離すことが出來ないので、あれを私のものにしなと流産するだらうと思ひます。すると、その母が言つた、あなたの欲しいもの、そのことを羊飼の人たちに言つて見ませう、いや、とは言はれないでせう。が、彼女は言つた、いや、あの人たちに私の欲しがつてゐるもの、

とを知られるのは恥づかしいわ。なあに、いいのよ、と、彼女は言つた、あのやうなものを欲しがるのは恥ではない、徳ですよ。そこで、マーシーは言つた、それぢや、お母さん、あれを賣つて下さらないか、羊飼の人たちに尋ねて下さいませんか。

さて、この鏡は千に一つといふものであつた。それは一方の方からは人をそのありのままの姿であらはすのであるが、それを唯他の一方にひっくり返して見さへすれば、巡禮の「君」御自身の顔と姿を示すのであつた。(ヤコブ書一・二三、コリント前書一三・一二)。そればかりではない、私はことの分つた人人とこの話をしたのであるが、その人たちの言ふところに依ると、彼等はあの鏡を眺めることに依り、彼の頭の上の荆棘の冠を眺めることが出來た、また、そこで彼の手に、彼の足に、彼の脇にある孔を見たといふことである。それにまた、鏡には極めて秀れたところがあつて、人人が彼を見たいと思ふやうなところを見せるのであつた、地上でも、天上でも、身を低くせられたありさまでも、高くあがめられたありさまでも、受難のために降下せられるところでも、支配のために再臨せられるところでも。

クリステイアナは、そこで、人知れず羊飼たちのところへ行き、(ところで、この羊飼たちの名はノレッヂ、エキスピーリアンス、ウォッチフル、シンシアであつた)(第一部二二六頁

参照)その人たちに言つた、女どもの中にひとり妊娠の者があるのですが、それが何ですか、このお宅で見たものを欲しがつてゐるやうに思ひます、あなたがたがいやと言はれるやうだと流産をするだらうと思つてゐるのです。

エキスピーリアンス 呼んであげなさい、呼んであげなさい、私どもの力にかなふものは必ずさし上げますよ。そこで、彼等は彼女を呼び寄せて言つた。マーシー、あなたが欲しいといふのは何ですか。すると彼女は顔を赤くして言つた、食堂にかかつてゐるあの大きな鏡です。すると、シンシアはそれをとりに走つて行つた、さうして愉快な合意で以てそれは彼女に與へられた。そこで彼女は頭を下げて、禮を述べ、さうして言つた、これで、あなた方の目に恩恵を得たことが分ります、と。

彼等はまた他の若い女たちにその願つてゐたものを與へた、またその夫たちがミスタア、グレイト、ハートと力を協せて巨人ディスペアを殺し、「疑惑の城」をとり壊したことを大いに賞揚した。

クリステリアナの頸のぐるりに羊飼たちは頸飾りをかけ、彼女の四人の女の頸にもおなじやうにした、また、彼等はこの人人の耳には耳輪を、額には寶石をつけた。

愈々ここを發つて行く氣になつた時、彼等は平安に發たせた、が、前にクリスチアンとその道連に與へられたあの二三の注意を與へなかつた。(第二部二三一頁参照)。その理由は、この人たちが嚮導となるためのミスタア、グレイト、ハートをもつてゐたからで。ミスタア、グレイト、ハートは萬事をよく心得てゐた者であり、彼等の注意をもつと適切に與へることが出来る、すなはち、危険のまさに迫つてゐるといふ時にすら、それが出来るからであつた。

それに、クリスチアンとその道連が羊飼たちから受けた注意を彼等はそれを實行する必要があるといふ時には忘れてゐた。(第一部二四九頁参照)。それ故、ここにこの仲間があつた他の仲間より有利な點があつたのである。

ここから彼等は歌ひながら進んで行つた、さうして言つた、

見よ、いかに適はしく、巡禮となりし者には、

その勞をなぐさむる立場のおかれたるかを、

人人は障碍もなくわれらを迎へ、

またの生をわれらの目的また家とせしかを。

われら、巡禮なれど、喜ばしき生を過しえむため、

いかなる珍らしき物をわれらに賜ひたるかを。

人人はまたわれらの行くところ、いづこにても、

われら、巡禮なることを、示すべきものを賜へり。

羊飼たちから立ち去つた時、幾程もなくして彼等はクリスチアンが「背信」の市に住んでゐた  
タイン・アウェイといふ者に出逢つたところへやつて来た。(第一部二三四頁参照)。そこで、この  
時彼等の嚮導ミスタア、グレイト・ハートは彼等にこの男のことを思ひ出させた、これはクリス  
チアンが背中に叛逆の文字を背負つてゐた、タイン・アウェイといふ者に出逢つたところでは、  
と言ひながら。この男に關してはこれだけのことを申し上げます、といふのは、彼が決して人  
の勸告を聴かうとしない、一旦、墮落したら最後、説得ではとめることの出来ない者だ、とい  
ふことなので。

十字架と石棺のあるところへさしかかりました時、彼はあすこを見よと言つて聞かした者に  
出會はしました。しかし、彼は齒ぎしりをし、地踏鞠を踏んで、自分の市へ立ち返る決心をし  
てゐるのだ、と言ひました。「門」に来る前に彼はエヴァンジェリストに逢ひました、エヴァ  
ンジェリストは彼に手をかけて、もう一度道へ引き戻さうとしました。しかし、タイン・アウェイ

イは彼のかういふことをするのも抵抗しました、さんざん無禮なことを行つた上、壁を越え  
て立ち去り、かうしてその手を通れました。(ヘブル書一〇・二六―二九)。

それから、彼等は先を急いだ。すると、むかし、リトル・フェイスが盜難に遭つたちやうどそ  
のあたりに、拔身の劍を持ち、顔を血まみれにした男が立つてゐた。そこで、ミスタア、グレ  
イト・ハートは言つた、汝は何者だ。その男は答へた、名はヴァリアント・フォートルース「奉  
眞勇夫」といふ者です。巡禮であり、「天の都」へ行くところでは、ところが、その途上にあ  
る時、三人の男が私をとり圍んでかういふ三つの事がらを持ち出しました。一、私が彼等の一  
味になるか、二、それとも、来たところへ歸るか、三、それとも、その場で死ぬるか。第一に  
對しては、私は長い年月、眞人間であつた、だから今更盜賊とわが運命を共にするなどといふ  
ことは以ての外である、と答へました。すると、彼等は第二に對しては何と言ふつもりだ、と  
尋ねました。そこで私は私の來たところを告げました、若しそこが不都合だと思はなかつたな  
らば、私は決してそこを棄てなかつたであらう。が、そこが全く私に適しないものであり、私  
にとつて不利益なものであると思つたら、そこを棄ててこの道を選んだのである、と。すると、  
第三に對しては何と言ふか、と訊きました。私は彼等に言つてやりました、私の命は輕輕しく

棄てて了ふには遙かに高い値うちのあるものだ。それに、汝等は少しもかうして私に事を選ばせるいはれの無い者だ、だから邪魔立てをすると、危いのは汝等である、と。すると、この三人、すなはち、ワイルドヘッド、インコンシデレイト、ブラグマティック〔亂暴氏、無謀氏、干涉氏〕は抜いてかかりました、で、私も抜いて立ち向ひました。

そこで、三時間の間、三人對一人で鎧を削りました。ごらんの通り、彼等は私の上に少少その武勇の迹を残し、又、私のものも少少もつて行きました。つい今しがた遁げて行つたのです。多分、諺にいふあなた方の馬の突進を聞いて遁げ出したのでせう。〔註。馬が走り出したので膽をつぶした男の諺があつたものと思はれる〕。

グレイト・ハート　しかし、三人對一人では、こりや大變な不釣合でしたな。

ヴァリアント・フォートルース　その通りです、でも、「眞」を味方にもつてゐる者にとつて、多いの、少いのといふことは物の數ではありませんよ。たとひいくさびと營をつらねて攻むるとも、と或人は申しました、わが心おそれじ。たとひ戦おこりて我をせむるとも我になほ恃あり、云々と。〔詩篇二七・三〕。それに、と彼は言つた、私は或記録の中で一人の人が一軍の兵と戦つたといふことを讀んだことがあります。又、サムソンは驢馬の腿骨で幾人の者を殺した

でせうか。〔註。士師記一五・一五に『サムソンすなはち驢馬のあたらしき腿骨ひとつを見出し、手をのべて之を取り、そをもて一千人を殺し』とある〕。

グレイト・ハート　すると、嚮導は言つた、何故聲をあげられなかつたのですか、誰かが加勢に來ることの出来るやうに。

ヴァリアント・フォートルース　さう致しましたよ、私の王に。王はお聞きになること、目に見えない助を興へて下さることが出来るといふことを存じて居ります、また、それで、私には十分なのです。

グレイト・ハート　すると、ミスタア、グレイト・ハートはミスタア、ヴァリアント・フォートルースに言つた。立派に對處せられましたな。劍を拜見させて下さい。そこで、彼は彼にそれを見せた。手にとつて、しばらくの間、それを眺めた時、彼は言つた、やあ、これはまさしくイエルサレムの刀だ。〔イザヤ書二・三〕。

ヴァリアント・フォートルース　さうなのです。あの刀を一振持つてゐて、うち揮ふ手と、用ゐる技があれば、それでもつて天使に打つてかかることも出来ます。攻めることさへ分つてゐれば、防ぐ方のことは心配しなくてもいいのです。その刃は決して鈍りません。肉でも、骨で

も、精神でも靈魂でも何でもかんでも斬り捨てます。(エペソ書六・一二—一七、ヘブル書四・一二)。  
グレイト・ハートでも、大分長い間闘はれましたな、お疲れにならなかつたかと思ひますが。  
ヴァリアント・フォートルース 劍が手にくつついてしまふまで闘ひました。このふたつが一  
つになつて劍が腕から生えたやうになつた時、血が指の中を流れた時には愈々勇氣を揮つて闘  
ひました。

グレイト・ハート 立派にやつて退けられました。あなたは罪と闘つて血を流すまで抵抗せら  
れました。「註。ヘブル書一二・四参照」。私どもと行動を共にして下さい、私どもと往復して下さい、  
い、私どもはあなたの仲間ですから。

そこで、彼等は彼を迎へてその血を洗ひ、彼等のもつてある物の中から食べものを與へ、う  
ち連れて先を急いだ。さて進んで行くうちに、ミスタア、グレイトはこの人が氣に入つた(と  
いふのは彼はもともと、腕の立つ者であるといふことが分つた人には大さう好意をもつ男であ  
つたからで)、それにまた、その仲間の中には氣の弱い者や身體の弱い者があつたから、それ  
で、いろいろなことを、例へば、先づ、何といふ國の人であるか、といふことを尋ねた。

ヴァリアント・フォートルース 暗黒州のもので、あすこで生れ、父と母とはまだあすこに

ゐるのでから。

グレイト・ハート 暗黒州ですつて、と嚮導は言つた、それは「滅亡の市」と同じ海岸にある  
るのでありませんか。

ヴァリアント・フォートルース さやうです。ところで、私を巡禮に出るやうにさせたのはかう  
いふことでした。ミスタア、テルトルー「告眞氏」といふ方が私どもの地方へ來られました、  
「滅亡の市」から出て行つたクリスチアンの行つたこと、すなはち、彼が妻子をふりすてて、  
巡禮の生涯に身を委ねたといふことについて話をせられました。その旅路で彼を押しとどめよ  
うとした蛇を殺したといふことや、志したところへ行き着いたことなどが確信をもつて傳へら  
れました。「註。「蛇」は悪魔の象徴で、この場合アポロンのことを言つたものと思はれるが、第一部一  
一五—一六頁を見ても分るやうに、アポロンは殺されたのではなく、逃げたのである。この誤は話が擴  
まつて行くにつれて變つて行くことを示したものであると、ヴェナブルスなどは考へてゐる。また、彼  
がその主の住家のいたるところで、特に、彼が「天の都」の門へ來た時には、どういふ歓迎を  
受けたかといふ話をせられました、といふのは、あすこでは、喇叭の音と輝ける者の仲間に依  
つて迎へられたと、その人は申しました。彼は又、都のすべての鐘が彼を迎へるに際して、悦

のために鳴りひびいたといふことや、どのやうな黄金の衣を着せられたかといふことなどをまだ多くの他のことと共に語りましたが、それは今申し上げることをさし控へます。一言で申しますと、その人がクリスチアンとその旅の話をしたのに感激して、私の心はその後を逐うて行くための止むに止まれない熱情に燃え上り、父も母も私をとどめることが出来ませんでした。それで、私は彼等から別れて、ここまで旅路を進めて来たのです。

グレイト・ハート あなたは門を入つて來られた、さうではありませんか。

ヴァリアント・フォートルース さうですとも、その同じ人は、また、若しわれわれが門からこの道に入ることをはじめなければすべては何にもならないことになるかと、教へて下さいましたから。

グレイト・ハート ごらんなさい、と、グレイト・ハートはクリステイアナに言つた、御主人の巡禮とそれに依つてあの方が得られたことは遠近にひろく擴がつてゐますよ。

ヴァリアント・フォートルース ぢやあ、これはクリスチアンの令夫人ですか。

グレイト・ハート さうです、さうなのです、それにこの人人はその四人の子たちです。

ヴァリアント・フォートルース おや、それで、やはり巡禮にお出でになるのですか。

グレイト・ハート さうですよ、本當にこの人たちは後を逐うて行かれるところですよ。

ヴァリアント・フォートルース 心から嬉しく思ひます。一緒に行かうとしなかつた者が、しかも猶、その後を逐うて「都」の門に入るのをごらんになる時には、善人、どんなにか喜ばれることとせう。

グレイト・ハート もとよりそれはあの人にとつての慰藉でありませう。自分がそこにゐるのを見るといふ悦の次には、そこで、その妻とその子たちに逢ふのが一つの悦とせうから。

ヴァリアント・フォートルース しかし、今、その話をせられてゐることでもありませんから、それについての御意見を伺はせて下さいませんか。或人は私どもがあすこへ行つた時に互に認めあふかどうかといふことを疑問とするのですか？

グレイト・ハート その人たちはその時自分を認めるでせうか、或は自分がその法悦の中にあることを見て悦ぶでせうか。若しこれらのものを認めるものとすれば、どうして、又、他人を認め、その幸福をも悦ばないわけがありませんか。

それに、血のつながる者は私どもの第二の自分なのですから、たとひさういふ事情はあすこでは消滅するにせよ、それらの者がそこにゐないよりも、そこで逢ふ方が喜ばしいといふこと



は合理的に結論することが出来るのではないでせうか。

ヴァリアント・フォートルース　なるほど、このことについて御説のあるところが分りました。私が巡禮に出たきつかけについてまだお尋ねになることがありますか。

グレイト・ハート　あります。お父さんとお母さんはあなたが巡禮になるといふことを承知せられましたか。

ヴァリアント・フォートルース　いいえ、考へられる限りの手段をつくして家にとどまるやうに説きつけようと思いました。

グレイト・ハート　そりやまた、どういふことを言つて反対せられたのですか。

ヴァリアント・フォートルース　それは懶け者の生涯だと申しました、若し私が懶惰と懈怠に心を傾けてゐるのでなければ、巡禮の境涯などといふものに好意を寄せないであらう、と。

グレイト・ハート　その他にどういふことを言はれましたか。

ヴァリアント・フォートルース　何ですよ、それが危険な道だといふのですよ。それどころか、世界中で最も危険な道は巡禮の行く道だと申しました。

グレイト・ハート　どういふところでこの道がそんなに危険であるかといふことを示されま

したか。

ヴァリアント・フォートルース　はい、それも、たくさんの細かい點について。

グレイト・ハート　その或ものを言つて見て下さい。

ヴァリアント・フォートルース　クリスチアンが殆んど窒息しさうになつた「絶望の泥沼」のことを話しました。入門を求めて入り門を叩く者に矢を射かけるためにベルゼブルの城に待ちかまへてゐる弓やりがあるといふことを話しました。又、森と暗い山のこと、「困難の丘」のこと、獅子のこと、ブラディ・マン、モール、スレイ・グッドといふ三人の巨人のことを話しました。その上、「謙遜の谷」に出没する兇悪な悪魔があり、クリスチアンはそれに依つて殆んど命を奪はれるところであつた、と言ひました。それに、と彼等は申しました、お前は「死の影の谷」を越えて行かなければならないよ、そこには妖怪變化がある、光が闇だ、道は畏や坑や陷阱や弾機などで一杯になつてゐる、と。彼等は又巨人ディスペーアのこと、「疑惑の城」のこと、巡禮たちがそこで遭遇した破滅のことを話しました。更に又、私は「疊惑の地」を通つて行かなければならないが、それが危険なものである、と、申しました。さうして、すべてかういふことのあつた後に私は一つの川を發見するが、その上に架つてゐる橋を發見しないと

いふこと、また、その川は私と「天の都」の間に横たはつてゐるといふことを。

グレイト・ハート それだけですか。

ヴァリアント・フォートルース いえ。彼等はまたこの道が人を欺く者や、善人を徑すぢの外へ向けやうとしてそこに待伏をしてゐる者に満ちてゐると申しました。

グレイト・ハート しかし、どうしてそれがお分りになつたのでせう？

ヴァリアント・フォートルース ミスタア、ウァールドリ・ワイズマンが欺かうとして待つてゐる、と申しました。また、フォーマリテイヤヒボクリシーが絶えず路上にうろろしてゐる、と申しました。また、バイ・エンヅ、トーカティーヴ、デマスといふやうな者が危く捲き込んでしまふといふこと、フラッタラアが網で捕へるといふこと、或は、生意義なイグノランスと憚るところなく「門」へ行くことだらうが、このイグノランスはいつもそこから丘腹にある坑へ追ひ返へされ、地獄への傍道を通らされるのだ、と申しました。

グレイト・ハート 請合つて、それだけでも勇氣を挫くには十分ですよ、だが、そこでお話は終りましたか。

ヴァリアント・フォートルース いや、待つて下さい。彼等はまた昔、あの道を試みた多くの人人のこと、あれほど多くの人人が絶えず語つてゐる榮光の幾分でも見つけることが出来やうかと、よほど先までその道に進んだ人のことを話しました、又、この人人が立ち返つて来たこと、あの徑すぢへ家から足を踏み出したことに對して自身の愚を示し、國中の満足を買つたといふことを。又、彼等はさういふことをやつた幾人も人の名をあげました、例へば、オプステイニットとブライアブルだとか、ミストラストとティモラスだとか、ターン・アウェイとアシスト老人だとか、その他まだ大分あります。この人たちの、と、彼等は申しました、その或者は見つけることが出来るかどうかを見るために遠くまで行つた、が、その一人として出かけることに依つて羽一つの重さに相當するほどの利益をすら見つけたものはひなかつた、と。

グレイト・ハート まだその上にあなたの勇氣を挫くやうなことを言はれましたか。

ヴァリアント・フォートルース 申しました。巡禮であつたミスタア、フィアリングといふ人のこと、彼がこの道をいかにも寂しく思ひ、この中ではかつて愉快な時をもつたことがなかつたといふことを申しました。又、ミスタア、デイスボンデンシーがその中で餓死をしさうになつたといふことを、そればかりではない、それから又、私は殆んど忘れてゐました。あのやうに噂の高かつた、あのクリスチアンその人ですら、「天の都」へ向ふそのすべての冒険の後、

確かに黒い川の中で溺死をしたのであり、そこから一步も先へ行かなかつたのだが、そのことはしかし、揉み消されてしまつたのである、と申しました。

グレイト・ハート　それでゐて、かういふことは一つもあなたの勇氣を挫かなかつたのですか。  
ヴァリアント・フォートルース　挫きませんでした、そんなことは唯それだけのとるにも足らぬことと思はれました。

グレイト・ハート　それはまた、どういふわけでしたか。

ヴァリアント・フォートルース　それは何ですよ、私はそれでもミスタア、テル・トルーの言つたことを信じたのですよ、で、それがさういふもの以上のところへ私を連れて行つてくれたのですよ。

グレイト・ハート　それぢや、これがあなたの勝利だつたのですね、このあなたの信仰が。

ヴァリアント・フォートルース　さうでした。私は信じました、だから出て來ました、「道」に入つて行きました、私に敵對するすべてのものと闘ひました、信ずることに依つて私は此處へ來てゐるのです。

まことの勇を見むとなら、

ここへ來させよ、その人を、  
風も、暴風雨も、何のその、

ここにぞ人は不撓なる。

はじめ誓ひし一念を、

一度なりとも挫くべき

落膽はここに絶えてなし、

巡禮となる一念を。

わびしき語り草をもて

彼をとりまく人人は、

おのれを亂すのみなれや、

彼の力はいやまさる。

いかなる獅子も恐ぢしめず、

彼は巨人と闘はむ、

されど、あくまで持せむとす、

巡禮となるその権利。

妖怪、變化、悪魔でも、

びくともさせじ、その意氣を、

彼はさとれり、最後には

命を紹ぐを。よしさらば、

空しき想通げ失せよ、

彼は恐れじ、人言を。

彼は日夜につとむべし、

巡禮となる勞役を。

この頃、彼等は「蠱惑の地」に辿りついた、そこは空氣が自然に眠氣を催さしめるところであり、またその場處は荆棘が一面に生え繁り、それが無いのはあちこちの「蠱惑の四阿亭」のあるところで、そこへ人が坐るとか、或はその中に眠るとかすれば、或人の言ふところでは、再びこの中で起き上つたり、目を覺ましたりすることがあるかどうかは疑問である、この森を通つて彼等は互に助け合ひながら、進んで行つた、又、ミスタア、グレイト・ハートは嚮導で

あるから先登に立ち、ミスタア、ヴァリアント・フォートルズは後陣をつとめて、守護人になつた、といふのは、悪魔か、悪龍か、巨人か、盜賊か、さう言つたものが後から襲ひかかつて害を加へるやうなことがあるかも知れないと懸念せられたからである。ここでは誰も皆手に拔身の劍をもつて進んだ、それが危険な場處であることを知つてゐたからである。彼等はまた、力の及ぶ限り互に勵まし合つた。フィーブル・マインドはそのあとから来るやうに、ミスタア、グレイト・ハートが命令した、また、ミスタア、デイスボンデンシーはミスタア、ヴァリアントの目の届くところにゐた。

さて、行くこと遠からず、たちまち大きな霧と闇が一同の上に襲ひかかり、長い間殆んど互に見ることも出来なかつた。そこで、彼等はしばらくは言葉でさぐり合はなければならなかつた、姿を見て歩かなかつたからで。

しかし、ここでは彼等の中の最も壯健なものでも歩行になやんだと思はなければならぬのであるが、ましてや足も氣力もまことに弱い者であつた女たちや子たちはどんなになやんだことであらう。でも實情は、先に立つ者の激勵の言葉と、終から進む者のそれに依つて、どうやら都合よくそこを切り抜けながら、道を辿つて行つたのである。

その道も亦、ここは泥と泥濘ひちらふでまことに難澁なものであつた。またこの地一帯には羸弱かよわい連中に氣力を持ち直させるための旗亭はたけとか料理屋とかいふほどのものもなかつた。ここでは、それ故に、呻き、喘ぎ、また吐息があつた。一人が叢くさむらの上に轉げると、一方、他の一人は泥に足をつつ込んで動けなくなつた。子供たちは、その或者は泥濘ひちらふの中に靴を失つた。轉んだ、と一人が言ふと、一方他の者は、おい、何處にゐるのだ、と言ふ、また第三の者は籤せんが絡みついて、脱け出すことが出来ない、と言ふ。

その時、彼等はとある小亭ちやうまにやつて來たが、それは温かで、巡禮には大いに神氣を爽快にするものであるやうに思はれた。といふのは、天井は立派に作られ、草木の緑で飾られ、腰かけや長椅子がとりつけてあつたからで。その中にはまた、疲れた者がそこに凭りかかることの出來る、柔らかな寢椅子があつた。一切を考へて見ると、これは、何としても誘惑であつた、巡禮たちはこの時既に道の悪いことに依つてよほど力を挫かれてゐたのである、が、彼等の一人としてそこに留まらうとする舉動きんどうをすら示したものはなかつた。そればかりか、彼等は嚮導きやうどうの忠告をよく守り、彼はまた、危険や危険の性質について忠實に告げたので、いつも彼等が危険に最も接近してゐる時には最も元氣を揮ひ起し、互に力づけ合つて、「肉」を制するのであつ

た。この四阿亭あつやは「懶惰者なまけものの憩いひ」と稱へられてゐた。巡禮の或者が疲れた時にそこで休息するやうに、出來るならばおびき寄せやうといふのである。

その時、夢の中で見てゐると、彼等はその寂しい地を進み、人がともすれば道に迷ひやすい、とあるところへやつて來た。ところで、あかるい時には彼等の嚮導きやうどうが、間違つた方へ導くやうな道を避けるにはどうすればいいかといふことを知つてゐたのであるが、闇の中でははたと行きつまつてしまつた。しかし、彼はそのポケットの中に「天の都」へ往還かうかんするすべての道の地圖をもつてゐた。そこで火を打ち出し（彼はまた火打箱を携へずに出かけることは決してなかつたので）、その書物或は地圖を一覽すると、それはその場處では氣をつけて右の方に廻るやうに、といふ。それに、若し彼がその地圖を見るやうに注意しなかつたならば、多分彼等は皆泥の中で窒息したであらう、といふのは、彼等のゐたところからほんの少しばかり先のところ、而も一番きれいな道の終るところに、どれほど深いとも知れぬ坑があり、それが泥ばかりで一杯になつてゐて、その中で巡禮を滅すためにわざとそこに設けられてあつた。

その時、私は心の中で思つた、巡禮に出かける者で、行きつまつた時、どの道をとらなければならぬかといふことを見ることの出來る、あの地圖を持ちたいと思はない者があらうか、

と。

彼等はそれからこの「疊惑の地」を進んで、今一つの四阿亭のあるところへさしかかった、さうしてそれは大通りの側に建てられてあつた。又、その四阿亭にはその名をヒードレス「不注意氏」トウー・ポウルド「不向見氏」といふ二人の男が横たはつてゐた。この二人はここまで巡禮を進めて来たのであるが、ここでその旅路に疲れ、休息のために坐り込んで、そのまま寝てしまつたのである。巡禮たちがこの人人を見た時、彼等は身動きもせず立つて、頭を振つた、彼等は眠つてゐる人人が憐れむべき状態にあることを知つてゐたからである。それから、彼等はどうすればいいか、このまま先へ進んでこの人人をその眠つてゐるままにしておかうか、或は、この人人のところへ歩み入り、目を覺まして見ようか、といふことを相談した。そこで、結局この人人のところへ行つて、目を覺ましてやる、といつても、それが出来たならば、といふのであるが、とにかくやつて見る事になつた。が、それにしても次の注意を拂つた、すなはち、彼等自身は坐らないやうに、又その四阿亭の提供する恩恵を受け容れないやうに、氣をつけることであつた。

そこで、彼等が入つて行つて、この人人に物を言ひかけ、その一人一人の名を呼んで呼びか

けた（嚮導はこの人人を知つてゐるやうであるので）、が、聲もなければ、答もなかつた。すると、嚮導は彼等を振り動かし、あらん限りのことをしてその眠を妨げようとした。すると、その一人が言つた、金が入つたら拂つてやるよ。これを聞いて嚮導は頭を振つた。己の手に劍を持つことの出来る間は闘ふのだ、と今一人は言つた。それを聞いて子供たちの一人は笑つた。

すると、クリステイアナが言つた、これはどういふことでせう？ 嚮導は言つた、彼等は寝言を言つてゐるのです。撃たうが、拷かうが、どんなことをしようが、この調子で答へるのです。或は、昔、海の波、彼を撃ち、彼は帆柱の上に眠つてゐた時に言つたやうに、我さめなば再びこれを求めん、と答へるのです。（欽定譯聖書箴言二三・三四、三五）。御存知のやうに、人が寢言を言ふ時にはどんなことでも言ひますが、その言葉は信仰や理性に支配せられてゐません。さきに彼等が巡禮に出かけることと、ここに坐り込むこととの間に辻褄の合はないところがあつたやうに、今はその言葉にさういふところがあります。ですから、「不注意」な者が巡禮に出ると、一人に對して二十人までかういふ目に遇はない者はないといふ、これが實に厄介なことなのです、といふのは、この「疊惑の地」は巡禮の敵がもつてゐる最後の據りどころなのです。だからこそ、ごらんの通り、道の果に置かれてゐるので、それで以て一層有利にわれわれに敵

對するやうになつてゐます。何故なら、と敵は思ひます、あの莫迦者どもが疲れた時位坐り込みたいと思ふ時があらうか。また、殆んどその旅路の果にある時位疲れさうな時があらうか。それで、この「蠱惑の地」はベウラの國〔註。第一部二九一頁参照〕に極接近したところにおかれであるので、それだから彼等の競走の果にも極近いのです。ですから、巡禮は自ら誠めなければなりません、ごらんの通り、寝込んでしまつて、何ものも目を覺まさせることの出来ない、これらの者に對して行はれたことが、自分たちの身にも起らないやうに。

すると、巡禮たちは身震をしながら、さきへ進みたいと言つた。唯、その嚮導に光を打ち出して貰ひたいと歎願した、残の道を提燈の光に助けられて行くことが出来るやうに。そこで、彼は光を打ち出した、それで、闇は大さう深かつたけれども、その助に依つて彼等は残の道を通り過ぎた。(ベテロ後書一・一九)。

けれども、子供たちは甚しく疲れ始めた、で、彼等は巡禮をいつくしみたまふものに向つてその道をもう少し樂にして下さい、と叫んだ。そこで、それから、少し先へ行つた頃に一陣の風が起つて霧を吹き拂つた、それで空氣は前よりもあかるくなつた。

それでも彼等は「蠱惑の地」から(大して)離れてはゐなかつた、唯、今は前よりもよく互

の顔を、また、彼等の歩くべき道を、見ることが出来た。

さて、彼等がこの地の殆んど果に達した時、少し先の方で、大さう心を痛めてゐる者の聲のやうな、或嚴かな聲を聞きとめた。そこで、先を急いで、前の方を見た。見ると、果せるかな、一人の男が跪いて、手と眼を上にあげ、上に在すものへ熱心に話しかけてゐるやうであつた。それを終ると、彼は起ち上り、「天の都」へ向つて駆け出した。すると、ミスタア、グレイト、ハートはその後から呼びかけた、おうい、その方、「天の都」へお出でになるのだと思ひますが、若しさうなら、道連にならうちやありませんか。そこで、その人は立ちとどまつた、さうして彼等は彼のところへ辿りついた。が、ミスタア、オネストが彼を見ると、直ちに言つた、私はこの人を知つてゐる。すると、ミスタア、ヴァリアント、フォートルースが言つた、これは誰ですか。これは、と彼は言つた、私が住んでゐた地方から來た人で、その名をスタンド・ファスト(確立氏)と申します、ほんたうに全くよい巡禮です。

そこで互に近づいた。と、すぐさま、スタンド・ファストはオネスト老人に言つた、おや、御老人、そこにゐられるのはあなたですか。さうですよ、と彼は言つた。あなたがそこにゐられるのと同じやうに、確かに私ですよ。全く嬉しいことです、と、ミスタア、スタンド・ファス

トは言つた、あなたをこの路で發見したといふことは嬉しいのは御同様です、と、對手は言つた。あなたが跪いてゐられるのを見つけたといふことは。すると、ミスタア、スタンド・ファストは赤面した。さうして、言つた、でも、何ですか、私をごらんになつたのですか。その通り、見ましたよ、と對手は言つた、そのありさまを見て私の心は嬉しくなりましたよ。どうしてです、何と思はれましたか？ とミスタア、スタンド・ファストは言つた、思ふ？ とオネスト老人は言つた、何と思ふべきでせう？ この路には心の清い人がゐる、だから、やがて道連になるに違ひない、と思ひました。若しあなたがわるくおとりにならなかつたならば、「と、スタンド・ファストは言つた、」どんなに幸でせう、が、若し私があるべき者でなければ、私はひとりでそれに堪へなければなりません。そりや本當です、と對手は言つた。しかし、あなたの恐れは愈々巡禮の王とあなたの靈魂との間が正しい關係になつてゐることを確證します。恒に恐るるものは幸福なりと、王は言つてゐられます。「註。箴言二八・一四」。

ヴァリアント・フォートルース ですが、同人、あなたがつい先ほど跪いてゐられた理由を言つて下さいませんか。何かある特別な恵があなたにさういふ義務を負はせたといふやうなことのためですか、それとも何かわけがあるのですか。

スタンド・ファスト そりや何です、私どもは、ごらんの通り「疊惑の地」にゐるのです、道すがら、私はこの場處の路がどういふ危険な路であるかといふことを、またここまで巡禮の旅をつづけて來た如何に多くの者がここでとどめられ、また滅されたかといふことを心の中で考へ込んでゐました。私はまた、この場處が人人を殺すところの死の様態を思ひました。ここで死ぬる者は激しい病氣では死なないのです。さういふ者にとつての死は彼等には格別苦しいものではないのです、「眠」の中に世を去るものは歡喜と快樂を以てあの旅路につくのですから。そりやもう、安んじてあの病の意のままになります。

オネスト すると、ミスタア、オネストは彼を遮つて言つた、四阿亭に眠つてゐる二人の男をごらんになりましたか。

スタンド・ファスト ええ、ええ、あすここではヒードレスとトゥー・ホウルトを見ましたよ、私の知る限り、あの人たちは腐るまであすこに横たはつてゐるでせう。(箴言一〇・七)。今も申しましたやうに、かうして物思に沈んでゐた時、そこへ出て來たのは大さう愉快ないでたちの、しかし、年をとつた一人の女でした。私の前に現れ、私に三つのものを、すなはち、その身體と、その財布と、その寢床を提供しました。ところで、本當のことを申しますと、私は疲れて



も居り、又眠くもあつたのです。それに梟の子のやうに貧乏だつたので、それをあの魔女は知つてゐたのでせう。「註。「梟の子のやうに貧乏だ」といふのはイギリスの古い俗語である。」さあ、それで、私は一度も二度もこの女の言ふことを斥けました、が、女は私の撃退をとりあげようとしないうで、につこりと微笑ひました。すると、私は腹が立つて來ました、それでも一向平氣なのです。それから再び申入れをして言ふには、若し私とその女の言ひなりになりさへすれば、私をえらい者、幸福な者にしてやる、何故なら、とその女は言ひました、私はこの世の女主人で、人は皆私に依つて幸福になるのですよ。そこで、私はその名を尋ねました、すると、マダム、パブル〔泡沫夫人〕であると言ひました。これは愈々私をその女から遠退くやうにさせました。が、女はなほも香餅を以て従いて來るのです。そこで、私は、ごらんになつたやうに、跪きました、さうしてさし上げた手と叫を以て、助けてやる、と仰せになつたものに祈りました。それで、ちやうどあなた方が來られた時に貴婦人は行つてしまつたのでした。そこで、私は、この、私の大なる救に對して感謝をつづけました。あの女が決して善いことを考へてゐたのではなく、寧ろ私を私の旅路からさしとどめようとしてゐたといふことを本當に信じてゐますから、オネスト 無論。その計畫は悪いものでしたね。が、待つて下さい、今、あなたがその女の

ことを話してゐられるので思ひ出しましたが、私はその女を見たことがあるか、或はその女のことを書いた話のやうなものを読んだことがあるやうに思ひますよ。

スタンド・ファスト 兩方でせう。

オネスト マダム、パブルですつて？ その女は丈の高い、美しい貴婦人で、ちよつと淺黒い顔色の人ではありませんか。

スタンド・ファスト その通り、當りました、ちやうどさういふ人です。

オネスト とてもなめらかに物を言つて、文句を終る時につこりと微笑ひましたか。

スタンド・ファスト そいつも、てつきり當りました。それはあの女のすることがちやうどさういふ風です。

オネスト 腰に大きな財布を下げてゐませんでしたか、手は度度その中に入つてゐませんでしたか、それがその人の心の悦とするものであるかのやうに、その錢貨をまさぐりながら？

スタンド・ファスト まさにその通りです。あの女がかうしてゐる間ずつと側に立つてゐたとしても、それ以上十分に私の前に現して下さることは出來ますまい、またそれよりよくその特徴を描くことは出來ますまい。

オネストでは、あの女の肖像を描いた者は上手な畫かきで、あの女のことを書いた者は本當のことを言つたのです。

グレイト・ハート その女は魔女です、その魔術に依つてこの地が蠱惑にかかつてゐるので、誰でも、その膝の上に頭を横たへる者は上から斧が懸つてゐる臺〔註。斷頭臺〕の上に横たへたのも同然です。又誰でも、その美に眼をとめたものは、神の敵と考へられてゐます。(ヤコブ書四・四、ヨハネ第一書二・一五)。巡禮たちの敵であるすべての者に、榮耀な生活をさせてゐるのはその女です。そればかりか、巡禮の生涯から多くの人を買収したのもその女です。とても饒舌家で、いつも、その女とまたその女たちは誰か彼かの巡禮のあとをつけて行き、この世のいいことを時には賞めそやしたり、時には薦めたりします。厚かましい、出しやばつたあばずれです。どんな男にでも話をしようとしませう。いつも貧しい巡禮たちを冷笑し、金もちを大さう賞め上げるのです。ある場處に錢貨を儲けることの巧な者があれば、その人のことをよく言ひながら、家から家へと觸れ歩きます。饗宴や酒宴と來たら、大の好物で、いつも何處かの本膳に向つてゐます。ある處では自分は女神であると言ひ觸らしました、ですから、彼女を拜む人があります。その女は欺瞞の時と公開の場處をもつてゐます、さうして、何者もその幸福に

比較し得るものを示すことがないと言ひ、また、公言して憚らないのです。人人が彼女を愛して大切にするならば、子子孫孫と共に住むことを約束します。或場處では、また或人にはその財布の中から埃のやうに黄金を投げ出します。人にちやほやせられ、よく言はれ、人人の胸の中で大事にせられることが好きなのです。その商品を薦めることには倦むところを知らず、自分を最もよく思つてくれる者を最も愛します。若しその言ふことを聽けば、或者には王冠と王國を約束します。それでゐる多くの者を絞索〔註。絞首臺の索〕へつれて行き、また、それ以上一萬倍の者を地獄へつれて行きました。

スタンド・ファスト ああ、とスタンド・ファストは言つた、私があつた女に抵抗したのは何といふお恵でせう、何故なら、あの女は一體何處へ私を引張つて行つたでせうか。

グレイト・ハート 何處へ！ 分りませんな、何處へは神さまでなければ、誰にも分りませんよ。でも、一般的に言へば必ずあなたを引張つて行つて、人人を滅亡と沈淪に引き入れた、多くの愚かにして害ある色慾に陥れたに相違ありません。(テモテ前書六・九)。

アブサロムをその父に叛かせたのも、ヤラベアムをその主人に叛かせたのも、あの女でした。

〔註。サムエル後書一六・一五—一八・一五、列王紀略上一・二六—四〇参照〕ユダを説きつけて、その

「主」を賣らせたのも、デマスと言ひ伏せて、聖なる巡禮の生涯を棄てるやうにさせたのもあの女でした。「註。マタイ傳二六・一四―一六、テモテ後書四・一〇、（第一部二〇二頁）参照」。何人も彼女のする災害を言ふことは出来ません。支配者と臣民との間に、両親と子供たちの間に、夫と妻の間に、人とその人自身の間に肉と心の間に、仲違をさせます。

ですから、マスター、スタンド・ファスト、お名前の通りであつて下さい、あなたがさうなすつた時にはすべての者が立つのです。

この論を聞くと、巡禮たちの間には喜悅と戦慄の混りあつたものが感ぜられた、が、たうとう彼等は聲をあげて歌つた。

巡禮の身のあやうさよ、

敵するものはいくたりか、

罪への道はいくすぢか、

うつそみの人つゆ知らず。

溝を避けれど、泥濘に

まろびて落つる者もあり。

油鍋より飛び出でて、

火に躍り込む者もあり。

この後、私が眺めてみると、彼等は太陽が晝夜を照らすベウラの國へやつて來た。（第一部二九一頁参照）。ここで、彼等は疲れてゐたので、しばらくの間、憩についた。またこの國は巡禮共有のものであり、その果樹園と葡萄園は「天の都」の王のものであつたので、彼等は王のものをも何でも勝手に頂戴することを許された。

しかし、やがて僅の間に彼等は氣力を回復した、といふのは、鐘が鳴りわたり、喇叭が絶えず美しい調を以て音を響かせるので、眠ることが出来なかつた、が、それでも彼等はかつてそれほど熟睡したことがない程の眠を眠つたかのやうに爽快な心もちになつた。ここでは又、街を歩いてゐる人人の噂が、また巡禮たちが市へ來ましたね、といふのであつた。すると、他の者が答へるのであつた、それに、今日は大分水を越えて行つて「黄金の門」に迎へられましたよ、と言ひながら。彼等はまた叫び出すのであつた、ちやうど今、市へ來られた「輝けるもの」の一隊がありますよ、あれに依つて見ると路にはまだ巡禮がゐるのです、いろいろな悲哀の後で、その人達を慰めるためにここへ迎へに來られたのですから。そこで、巡禮たちは起き上つて、

あちこちを歩いた。しかし、その耳は今、何といふ天の物聲に満たされ、その眼は何といふ天のまぼろしに喜ばされたことであらう。この國では彼等の胃や心に嫌な思をさせるやうな、何物をも聞かず、何物をも見ず、何物にも觸れず、何物をも嗅がず、何物をも味はなかつた。唯、彼等がその上を越えて行くことになつてゐた川の水を嘗めて見た時、少少口あたりが苦いやうに思つたが、飲み下して見ると、すつと甘いものであることが分つた。

この場處には、昔、巡禮であつた者の名を書き留めた記録と、彼等の行つた有名な行動一切に關する歴史があつた。ここでは又、川が或人には満潮になり、或人が越えて行く間は干潮になつたといふことについて、大いに談論がはづんだ。或人にはその水が涸いて了つたやうになるのであつたが、その一方、他の人人にはその堤にあふれたのである。

この場處では市の子供たちが「王の花園」へ入つて巡禮たちへ贈るための花束をつくり、深い愛情を以てそれを彼等のところへ持つて来るのであつた。ここには又、樟腦が甘松と共に生え、サフラン、香菖蒲、肉桂が、乳香、沒藥、蘆薈及びすべての主立つた香料の樹木一切と共に生えてゐた。これらのもので、巡禮の部屋はそのここに滞在してゐる間香はしくせられた。又、これらのもので、その身體は定められた時川を越えて行く準備をするために洗ひ潔められた。

た。

さて、彼等がここにとどまつて吉祥の時機を待つてゐる間に、巡禮クリスチアンの妻クリステイアナといふ者へ大切な用事をもつて、「天の都」から、一人の飛脚が來たといふ噂が市に傳へられた。そこで、彼女のための問合せがあり、その住んでゐた家につきあはれ、そこで、飛脚は彼女に手紙を渡した。その内容はかうであつた、おめでたう、善女、主人があなたをお召しになつてゐられる、またこれから十日以内にあなたが不滅の衣を着て大御前に立つのを待つてゐられる、といふ通知をお傳へ致します。

彼がこの手紙を渡した時、彼がまことの使者であり、又彼女に急いで立ち去るやうに告げるために來たものである、といふ確かな證據を見せた。その證據といふのは、愛を以て鋭くせられた鐵がついてゐて、その心にたやすく入るやうになつてゐる矢であり、次第に効果を示すやうに作用した結果、定められた時にはどうしても立ち去らなければならぬやうになつてゐる。

クリステイアナが彼女の時の來たこと、又彼女がこの一行の中でむかふへ渡る最初の者であることを知つた時、彼女はその嚮導ミスタア、グレイト・ハートを呼び寄せて、事情がどうなつてゐるか、といふことを告げた。そこで、彼はその報知を心から喜んでゐること、又その飛

脚が彼を迎へに來たのであつたならば、彼は喜んであらう、といふことを告げた。すると彼女はその旅路のために萬事を用意するにはどうすればいいかといふことについて忠告をして貰ひたい、と言つた。

そこで彼は告げた、かやうかやうにしなければなりません、生き残る私どもは川べりまでお供致しませう、と言ひながら。

そこで、彼女は子供たちを呼び寄せ、彼等にその祝福を與へ、今猶彼等の額につけられた記號を讀んで慰められてゐるといふこと、又彼等が彼女と共にそこにゐること、彼等がその衣をこのやうに白く持ちつづけたのを喜んでゐるといふこと、を告げた。最後に、彼女は所持つてゐた少しのものを貧しい人人に遣し、息子や息女に使者が彼等を迎へに來る時の用意をしてゐるやうに命じた。

これらの言葉をその嚮導とその子供たちに語つた時、彼女はミスタア、ヴァリアント・フォートルースを呼び寄せた、さうして彼に言つた、あなた、あなたは何處でも眞實の心をもつた方であることをお示しになりました。死に至るまで忠實であつて下さい、さらば、わが王はあなたに生命の冠冕を與へたまふであります。〔註。ヨハネ黙示録二・一〇〕。私は又あなたが私の子

供たちに目をかけて下さることをお願い致したいと思ひます、いかなる時でも彼等が氣力を失ふのをごらんになつたならば、激ましてやつて下さい。女たち、子供の妻たちは忠實な者でした、それで、彼等の上に約束の成就せられることがその終となるでせう。しかし、ミスタア、スタンド・ファストには一つの指輪を與へた。

それから、彼女はミスタア、オネストを呼び寄せた、さうして彼に言つた、視よ、これ眞にイスラエル人なり、その裏に虚偽なし。〔註。ヨハネ傳一・四七〕。すると、彼は言つた、あなたがシオンの山へお出かけになる日はうらかな日であることを祈ります、またあなたが靴を濡らさず川をお渡りになるのを見るのは嬉しいこととせう。しかし、彼女は答へた、濡れようが、乾かうが、私は立ち去りたいと思ひます。私の旅の天候がどうであらうと、あそこへ行けば、坐つて、からだを休めて、身を乾すだけの時が十分にあるでせうから。

その時、あの善人、ミスタア、レディ・トゥ・ホールトが彼女に逢ひに來た。そこで、彼女は彼に言つた。ここまでのあなたの旅には困難が伴つてゐましたが、それはあなたの憩をしほ氣もちのいいものとするでせう。しかし、よく目を覺まして、用意をしていらつしやい、思ひもよらぬ時にお使者が來るかも知れませぬよ。

彼の後から、ミスタア、デイスボンデンシーとその女マッチアフレイドが入つて来た。この人達に彼女は言つた、あなた方は巨人デイスベアの手下から、また「疑惑の城」から救はれたことを思ひ出して、いつまでも感謝してゐなければなりませんよ。あの神恵の結果はあなた方が安全にここへ來られたことです。目を覺ましていらつしやい、恐怖を棄てておしまひなさい、落着いていらつしやい、さうして、終まで望をもつていらつしやい。

それから、彼女はミスタア、フィーブルマインドに言つた、あなたはとこしへの生の光の中に生き、慰藉をもつてあなたの王を見ることが出来るやうに、巨人スレイグッドの口から救はれたのです。唯、お勧めすることは王があなたを迎へに人を送られる前に、ともすればその善意を恐れたり、疑つたりする、あなたの癖を悔改めることです、でないと、彼が來られた時にあの過失のために顔を赤めながら、彼の前に立たなければなりませんから。

さて、クリステイアナの立ち去るべき日は迫つて來た。それで、路はその旅立ちを見る人人で一杯であつた。が、どうだらう、川むかふの堤は、すべて彼女に附添つて「都の門」へ行くために上から降りて來た馬や戦車で一杯であつた。そこで、彼女は出て來た、さうして、川べりまで従いて來た者へ訣別の手を振つて、川に入つた。彼女がここで言つたのを聞いたといふ最後の

言葉は、主よ、私はまゐります、みもとに住み、感謝を申上げるために、といふのであつた。

そこで、子供たちと友だちはその場處へ歸つた、クリステイアナを待つてゐた人人が彼等の見えないところへ伴れて行つたから。かうして彼女は行き、その夫クリスチアンが彼女より前に行つた歡喜のすべての儀式をもつて「門」を訪ひ、中に入つて行つた。

彼女が立ち去る時に子供たちは泣いた、が、ミスタア、グレイト・ハートとミスタア、ヴァリアントは歡喜のあまり、美しく調を合はせた鏡鉞と堅琴を奏でた。

時が経過するうちに、再び一人の飛脚が市へ來た、ミスタア、レディ・トゥ・ホールトに用事がある、といふ。そこで、彼を尋ね出して、彼に言つた、私はあなたが愛し、且つ、杖に縋つてではあるが、従つて來られた方の名代にまゐりました。使の趣はその方が復活の日の翌日、その王國であの方と食事をするため、食卓で待つてゐられる、といふことを申上げることです。それ故に、この旅のために用意をして下さい。

そこで、また、彼が眞の使者であるといふ證據を與へた、われは汝の黄金の鑿を碎き、銀の紐を解けり、と言ひながら。(傳道之書一二・六)。

この後、ミスタア、レディ・トゥー・ホールトはその仲間の巡禮を呼び寄せて、彼等に告げた、私は召されました、で、神は必ずあなた方をお訪ねになります。そこで、彼はミスタア、ヴァリアントに彼の遺言状を作つて貰ひたいと言つた。生き残るべき人に遺すものといつては、その杖かきざえと好意の外に何もなかつたので、彼は斯う言つた、この杖かきざえを私の足あとを辿る子供へ、私が行つたよりも立派なものであることを示すやうにとの多くの温い思をこめた好意と共に遣します。

それから、彼はミスタア、グレイト・ハートにその案内と親切を謝し、かくて、彼の旅路に向つた。川の縁かぢへ来た時に、彼は言つた。今はもうこの杖かきざえが要らなくなりました、あすこに私が乗るための戦車と馬がゐますから。彼が言ふのを聞いたといふ最後の言葉は、よくこそ來れ、命よ、といふのであつた。かうして、彼はその道に進んだ。

この後、ミスタア、フィーブル・マインドは飛脚が彼の部屋の戸口で角笛つづみを鳴らしたといふ報告を傳へられた。やがて、その飛脚は入つて来て、彼に告げた、私はあなたの御主人があなたに御用があるといふこと、又、あなたは輝く御顔を見なければならぬといふことを、申上

げるためにまゐりました。私の使命が眞まことであるといふことの記號しごうとしてこれを受取つて下さい。窓より窺ふ者は目昏くらむなり。(傳道之書一二・三)。

そこで、ミスタア、フィーブル・マインドはその友だちを呼び寄せ、どういふ使が彼に傳へられたか、又、どのやうな記號しごうを使命の眞まことについて受取つたかといふことを告げた。それから、彼は言つた。私は誰に遺す何物も持つてゐませんから、何のために遺言状を作りませう？ 私「氣落した心」はあとへ置いて行きます、私の行くところではその必要がありませんから。それは又、最も貧しい巡禮にさづける値うちもないものです。ですから、私がゐなくなつた時、ミスタア、ヴァリアント、あなたがそれを塵塚の下へ埋めて下さるやうにお願い致します。かう言つた上、彼が出發することになつてゐたその日が來たので、彼は他の者のやうに川に入つた。その最後の言葉は信仰と忍耐を持ちつづけよ、であつた。かうして、彼は彼岸に渡つた。

月日が多くなるものを経過させた時、ミスタア、ディスボンデンシーが召し寄せられた。何故なら、飛脚が來て、この使の旨を彼に傳へたからである。戦いくさく人よ、これはこの次の「主の日」〔註。日曜日〕疑念一切からの救を喜んで叫ぶために、あなたの「王」と一緒にする用意をせられるやうに、とのお招きです。

また、その使者は言つた。私の使命が眞であるといふことは、これを證據として受取つて下さい。そこで、彼は、蝗もその身に重し、を與へた。(傳道之書一・二・五)。ところが、名をマツチ、アフレイドといつた、ミスタア、デイスボンデンシーの女は、かうして行はれたことを聞いた時に、父と共に行きたい、と言つた。そこで、ミスタア、デイスボンデンシーはその友だちに言つた、私自身と私の女がどういふものであつたか、また、あらゆる仲間の中でどんなに厄介な振舞をしたかといふことは皆さまが御存知です。私の遺言、又、女の遺言は私どもの落膽と意氣地のない恐怖は、私どもが立ち去る日よりとこしへに、何人にも受容れられないやうに、といふことです。私が亡くなつた後にはそれらのものが他の人にお仕へをしたいといふことが分つてゐますから。といふのは、あからさまに申しますと、これらのものは亡靈なのでして、私どもが當初巡禮となつた頃に迎へ入れ、それから後は拂ひ退けることが出来なかつたのです。で、これらのものはうろつき廻つて巡禮たちの待遇を求めるだらうと思ひます。が、私どものために、戸を閉めて入れないやうにして下さい。

立ち去るべき日が來た時、彼等は川の縁へ出かけた。ミスタア、デイスボンデンシーの最後の言葉は、いざさらば、夜よ、よくこそ來れ、晝よ、であつた。その女は歌ひながら、川の中を通つて行つた、が、何を言つてゐるのか、誰にも分らなかつた。それから、後、暫くして、市に飛脚が來て、ミスタア、オネストを探ねてゐるといふ出來事があつた。そこで、その飛脚は彼のゐた家來て、この數行の書狀を彼の手に渡した、あなたはこれから七日先の夜、その「父」の家で、あなたの「主」の御前に出頭することを命ぜられてゐます。又、私の使命が眞であることの記號としては、汝の歌の女子がみな身を卑くせられむ。(傳道之書一・二・四)。そこで、ミスタア、オネストはその友だちを呼び寄せて、彼等に言つた、私は死にます、が、遺言狀は作りません。私の正直は持つて行きます、後に來る人にはこのことを話して下さい。立ち去るべき日が來た時、彼は川を越えて行くために向つた。ところが、その時、川はところどころで堤に水が溢れてゐた。しかし、ミスタア、オネストは生前グッド・コンシエンス〔良心氏〕といふ者にそこへ迎へに來てくれるやうに、と話しておいたので、それを彼はその通りにし、手を貸して、川越を助けた。ミスタア、オネストの最後の言葉は、神恩は支配する、であつた。かうして、彼は世をあとにした。

この後、ミスタア、ヴァリアント・フォートルースが他の者と同じ飛脚に依つてお招きを蒙り、



そのお招きの眞であることの記號として、吊瓶は泉の側に破れたり、といふ、これを受取つたといふ噂が傳へられた。(傳道之書一二・六)。彼がそれを悟つた時、彼は友だちを呼び寄せて、彼等にそのことを告げた。それから、彼は言つた、私は祖先のもとへ行かうとしてゐます、大なる困難を以てここまで来たではありませんでしたが、しかし、今、私のゐるところへ到着するため私の受けたすべての苦難を悔いしないのです。私の劍は私の巡禮のあとを紹ぐ人に譲り、私の勇氣と武藝はそれを自分のものとするこの出来る人に譲ります。私の傷や傷痕は、今、私に報酬を與へたまふ者に、彼の戦を戦つたといふことの證人となつてくれるやうに、持つて参ります。彼がここを去るべき日が来た時、多くの人人が川べりまで従いて行つた、そこへ入つて行く時、彼は、死よ、汝の刺は何處にかある、と言つた。(註。コリント前書一五・五五)。又、彼がさらに深く降りて行つた時、彼は、墓よ、汝の勝は何處にかある、と言つた。(註。欽定譯聖書コリント前書一五・五五)。かうして彼は、渡つて行つた、またすべての喇叭は彼のために彼岸に鳴りひびいた。

すると、ミスタア、スタンド・ファストを迎へるためのお招きがやつて来た。(このミスタア、

スタンド・ファストといふのは、疊惑の地で跪いてゐるところをその他の巡禮たちが見つけた、あの人である)といふのは、飛脚がそれをその手に開いまままで持つて来たからである。その内容は、彼は生活を變へるために用意しなければならぬ、彼の主人は彼がこれ以上このやうに遠い處にゐることを望まれないのであるから、といふことであつた。これを聞いてミスタア、スタンド・ファストはちよつと思案した。いや、と使の者は言つた、私の使命の眞を疑はれる必要はありません、ここにその眞の記號、汝の轆轤は井の傍にて破れたり、がありますから。(傳道之書一二・六)。そこで彼は彼等の嚮導であつたミスタア、グレイト・ハートを呼び寄せて、彼に言つた、あなた、巡禮の生涯に大して御交際を願へなかつたのが私の運命ではありませんが、しかし、存知上げてからこのかたあなたは私にとつて大さう利益になる方でした。故郷からやつてまゐりました時に私は妻と五人の幼い子供たちをあとに残しました。お願をさせていだきたいのは、お歸りになつた時(まだまだ多くの聖なる巡禮たちの案内人になる望をもつて、御主人の家へ歸つて行かれることは分つてゐますから)、家族のところへ使を送つて、私の身に起つた事やこれから起ることをすつかり知らせてやつていただきたいのです。なほその上に私が幸福にここへ到着したこと、又、現に最近私の入つてゐる祝福まれた状態を言つてやつ

て下さい。又、クリスチアンとその妻のクリスティアナのことを、またあの女とその子供たちがあの女の夫のあとから来たことを言つてやつて下さい。又、あの女がどういふ幸福な終を遂げたか、どこへ行つたか、といふことを言つてやつて下さい。彼等のための祈禱と涙以外には家族へ送るものは殆んど何もありません。彼等を説きつけるためには、若しあなたがこれらのことを知らせて下さるならば、それで十分だらうと思ひます。ミスタア、スタンド、ファストがかういふ風に萬事を整へた時、それに、急いで立ち去らなければならぬ時が来たので、彼も亦、川へ降りて行つた、ところが、その頃は川の中が極めて穏やかであつた、それで、ミスタア、スタンド、ファストは、殆んど中途までその中に入つた時、暫の間立つて、そこまで彼について行つたその道連と話をした。さうして、彼は言つた、

この川は多くの人人の恐れたものでした、實のところ、私もそれを思つて屢々おびえたものでした。しかし、今、私は安らかに立つてゐるやうに思はれます、私の足はイスラエルがこのヨルダンを越えた時、契約の櫃を擔つてゐた祭司たちの足の立つてゐたところを踏み占めてゐます。(ヨシヤ記三・一七)。水はなるほど口あたりが苦く、胃の腑には冷たいのですが、私の行か

うとしてゐるところや、對岸で私を待つてゐる案内のことを思ひますと、その思は私の心に光り輝く炭火のやうになつてゐます。

私は今、私の旅路の果にゐることが分ります、私の苦勞の多い生涯の月日は終りました。私は今、私のために荆棘を以て冠をかぶらせられたあの頭と、唾を吐きかけられたあの顔を見に行かうとしてゐるのです。

私は、昔、人傳に聞いたことと、信仰に依つて生活しました。今や見ることに依つて生活するところに行き、そのお對手を楽しむ方と一緒にならうとしてゐます。

私は私の「主」のことを人が語るのを聞くのが好きでした、その靴迹を地上に見たところでは何處でも私の足をも入りたいと切に望みました。

その名は私にとつては麝香の函のやうなものでした、さうなんです、すべての香料よりも香はしいものでした。その聲は私にいと美しいものでした、又その顔を私は太陽の光をいとも切に願つた者よりも願ひ求めたのでした。その言葉を私は拾ひ集めて私の糧とし、また、私の氣落ちを鎮めるための鎮靜劑としました。彼は私を支へて下さいました、それで私は罪過を避けて來ました。實際、私の歩みはその道の中で強められたのです。

さて、彼が、かうして談論はなしをしてゐる時に彼の顔が變つた、その強きもの「註。マタイ傳一二・二九参照」が挫くじけた、さうして、受け容れたまへ、御許にまゐります、と、言つた後、彼は彼等から見えなくなつた。

しかし、巡禮たちが登つて行き、一人一人と相次いで「都」の美しい門へ行く時に、そのひろびろとした國が彼等を歓迎するための馬と戦車に、喇叭を吹く人人と笛を吹く人人に、歌唱の人人と絃樂器かなを奏かなでる人人に満たされたのを見るのは盛なものであつた。

クリステイアナの子供たち、クリステイアナがその妻と子供と共に伴れて來た四人の息子たちのことはと言へば、彼等が越えて行くまで、私は私がゐた場處にとどまつてゐなかつた。また、そこから歸つたより後、或人の言ふのを聞いたところでは、彼等はまだ生きてゐる、それで、しばらくの間、彼等の住んでゐたその場處で教會の者は増えて行く一方であるといふことであつた。

萬一もう一度あの方面へ行くやうなことであれば、聞きたいといふ人人に、ここで言ひ洩らしたことがらの話をするかも知れない。それまでの間、讀者におわかれを申上げる。

— 第二部了 —

『天路歷程』完。

附

錄

## ジョン・バニヤンと「天路歷程」

### 一 ジョン・バニヤン

祖先に天才があつたといふのでもなく、環境が幸福であつたといふのでもない。一切の文明から遠く離れた片田舎の貧しい鑄掛屋の子として生れ、大學の教育はもとより、専門程度の教育さへ受けたことはなく、聖書以外には殆んど書物の影響といふほどのものをも認めることの出来ない一人の清教徒が、聖書に次いで最も廣く讀まれ、又最も多くの國語に翻譯せられた文學上の作品を書き、歿後二世紀に亘るその民族の宗教思想に聖書以外の如何なる書物よりも有力な感化を興へたと言はれてゐる。これを考へると、人間の才能といふものには到底測り知ることの出来ない力が潜んでゐるやうに思ふ。イギリスの文學に於けるバニヤンの存在はシェイクスピアやバインズとの存在と同じやうに、或意味に於いては彼等のそれにもまして、純眞な天才、生地のままの才能といふやうなものがあり得べきことを想到せしめないでは措かない。

ジョン・パニヤンは一六二八年十一月、イギリスの中部地方、ベッドフォードシアのエルストウといふ一小村に生れた。パニヤンの父、トマス・パニヤンは鑄掛屋 (tinker) である。尤も通常鑄掛屋といふものに依つて聯想せられる流浪の民のやうなものではなく、貧しいながらも一戸を構へた店の主であつたが、村の中の鍋釜を集めて來ては取繕ふことを仕事にする者であつたには相違ない。初等教育は一マイル半ほど隔つたところにある、ベッドフォードの文法學校グラマースクールに通ひ、そこで読み書きの手ほどきを授けられた。エルストウには又、國教會の寺院があつたから、日曜の午後、村民の子弟を集めて教へる信仰問答キャテキズムなどに依り、多少は宗教上の智識を涵養したであらう。幼少の頃の性向は何となく後年の才能の向ふところを暗示してゐるやうに思はれる。『神恩無量』 Grace Abounding の中に自ら告白するところに依れば、冒瀆の言葉を慎まず、好んで虚偽を語つたといふことであるが、清教徒として反省した場合にそれがよくない習慣であつたことは言ふまでもない。しかしながら、無邪氣な村童の中に現はれた性向上の特色として考へると、天性激烈な感情と豊富な想像力を具へた少年にはありがちの傾向であり、表現せられた言語の効果ともいふべきものに快感を感じる者であつたと思はれる。彼は又、さまざまの夢や幻に依つて惱まされ、その中でも最終審判と地獄の光景を忘れることが出来なかつたと言つてゐる。

初等教育を終つた頃から十七八歳の頃までは父の家に留まつて家業の手傳をした。鑄掛職を修業したのであるが、この間に二三度命拾ひをしたことがある。一度は何處かの海岸へ行き、入江の中で殆んど溺死しようとした。一度はボートから川の中に落ち、泳ぐことが出来なかつたので、この時も命が危なかつた。一度は毒蛇に巻きつかれたが、咬まれなかつた。これらは皆神の警告であつたが、パニヤンは猶その行を改めなかつたと告白してゐる。『神恩無量』の中に自分を罪の深い者とする言葉があまり激烈であるため、一體どのやうな罪を犯したのであらうかと思ふのは自然であるが、パニヤンの生涯を通じて大酒を飲んだといふやうな痕迹は何處にも見當らず、女に狂つたとか、賭博に耽つたとかいふやうな微證もない。サウジーやコウルリッチは破落戸破落戸であつたと言つてゐるが、それも證據のないことである。唯、舞踏や、鐘樓の鐘を鳴らすことや、戸外の運動を好み、盛に悪口を吐き、想像に任せて勝手放題なことを言ふ元氣な青年であり、それと共に極めて感受性の強い一面をもつてゐたと思はれる。聖書は神の言葉であり、舊約聖書も新約聖書も一言一句盡く事實を述べたもので、善惡の靈の確執する世界をそのまま示現したものであると思はれた時代である。幼年時代よりその心を捉へて離さ

なかつた最終審判や地獄の呵責に對する恐怖は愈々深刻を加へて行つたに相違ない。聖書以外には『サア、ビーヴィス・オヴ・サウザムプトン』 *Sir Bevis of Southampton* とシド・ロマンズを讀んだといふことであるが、それなどもバニヤンに於ける中世紀的な一面に多少の影響を與へたかも知れない。

一六四五年、バニヤンは軍隊に入つた。一つの理由は母が亡くなり、幾程もなく父が再婚したので、家庭が面白くなかつたからであると言はれてゐるが、詳しい消息は分らない。それよりも確かな理由は王黨と議會黨の戦端が開かれ、イギリス國內の壯丁はいづれか一方の軍隊に入ることを餘儀なくせられたからである。バニヤンの入つたのは王黨軍であつたか、議會軍であつたかといふことにも議論が區區であつた。カーライルは『オリヴァ・クロムウエルの書簡と演説』 *Oliver Cromwell's Letters and Speeches* の書簡第二十九の條にレスタアの戦のことと述べて、『ジョン・バニヤンはこの夜レスタアにゐると思ふ』 "John Bunyan, I believe, is this night in Leicester." と言つてゐる。レスタアの城を守つてゐたのは議會軍であつた。フルードはバニヤンが王室に對して抱いてゐた尊敬とクロムウエルの叛逆に對する反感より推して王黨軍に加はつてゐたものと考へてゐる。マコーレーはカーライルと同じやうに考へ、バニ

ヤンの全集を校訂したオッフアはフルードに與する。この問題は、しかしながら、ジョン・ブラウンの傳の中にバニヤンの服務年月を記載した議會軍の名簿が提出せられたことに依つて一應解決を告げた。バニヤン自身直接この時の戦争に言及したと思はれるものは、或日彼の代りに任務についてゐた戦友が頭を射抜かれて死んだといふ一個所があるばかりである。マコーレーやステイヴンスンの言ふやうに、當時バニヤンの親しく目撃した議會軍の將卒の中には『天路歷程』に於けるグレイト・ハートやヴァリアント、フォートルースの原型と見るべき者があつたかも知れない。

軍隊生活は數年で終り、バニヤンは郷里へ歸つて、再び父の家業に従つた。その最初の結婚は、一六四八年の末か一六四九年の初の頃であつたと考へられてゐる。妻の名は知られてゐない。唯、敬虔な兩親より生れた信仰の篤い婦人であり、二卷の宗教書を持つて來たといふことが傳へられてゐる。エセックス、シュイーベリの住職であつた清教徒アーサフ・デントの『平民の天に行く道』 *The Plain Man's Pathway to Heaven* とバンホアの監督で、王世子ヘンリーの侍講であつたリネーウィス・ベイリー博士の『信心の實踐』 *The Practice of Piety*——この二卷を若い夫婦が耽讀したといふことである。その外には二人の間に匙一つ皿一つさへ無いとい

ふ、赤貧洗ふが如き状態であつた。パニヤンはやうやく二十歳になつた頃であり、幼少の頃の悪癖は軍隊生活に依つて募りこそすれ、衰へるやうなことはなかつたと思はれるのであるが、この妻と、又、これらの宗教書の影響の下に次第に緩和せられ、それと共に漸次敬虔な信仰の生活に入つて行つた。日頃好む遊戯や娯樂などを一つ一つと棄て去り、冒瀆の言葉を慎しむやうになり、禮拜に出席し、説教を傾聴し、聖書を愛讀した。パニヤン自身もよほど改心の實が擧つたものとして自ら安んじてゐたと思はれる。ところが、或日の午後、ベッドフォードの街の片隅で鑄掛屋の仕事をしてゐる間に、聞くともなしに聞いた三四人の女の立ち話は、パニヤンの心にこれまでの生涯にかつて考へたこともない新しい世界を展開した。その話は宗教上のことであり、パニヤンも亦宗教上の論議には興味をもつてゐたので、耳を聳てて聞いたのであるが、どうしてもその要旨を理解することが出来なかつた。新生、心の中の神の御業、本來の性質の衰れた状態、神が主イエスに於ける愛を以て訪れたまふこと、心を慰さめ、力づけ、悪魔の誘惑に耐へしめた言葉或は約束、サタンの暗示と誘惑、それに依つて惱まされたこと、どういふ風にしてそれにたへたかといふことなど、パニヤンには盡く耳新しいことをこの貧しい女たちは日常の問題のやうに理解しあつて話をしてゐるのであつた。彼等は實に楽しさうに聖書

の言葉を語り、その行状も亦これに適はしいものであつた。

この女たちはジョン・ギッフオドといふ人を中心とする清教徒の小さな宗派の人人であり、その話してゐたことは平生ギッフオドから聞いてゐたことや、その宗派の中でいつも話しあつてゐることであつた。ギッフオドはケントの人、元來、王黨の大尉であつた。メイドストウンの戦に捕虜となり、フリアアックスに依つて死刑を宣告せられ、牢獄から逃亡してベッドフォードに潜伏してゐる間、酒と賭博に耽り、キリスト教徒などは大嫌だといふ荒武者であつたが、激烈な悔悛の後、生れかはずなやうな聖者になつて信仰を説き始め、一六五〇年、統一教會といふ教會を創設した。パニヤンがこの女たちに逢つたのはちやうどその頃であつたと思はれる。その後、この女たちを通じて宗派の人人と交り、一六五三年にはその一員となつた。この間に經過した精神上の関歴は『神恩無量』の中の精彩に満ちた告白であり、希望と絶望と、疑惑と正覺と、苦悶と法悦との激烈に相交る中を、さまざまの誘惑と幻想に惱まされながら、聖書の斷章零句を最後の據りどころとして一心不亂に靈魂の救を求めて行く求道者パニヤンの姿は『天路歷程』に於けるクリスチアンを現實の世界の中に示したものである。パニヤンはまだエルストウに住み、そこで、盲目の長女メアリと次女エリザベスとジョン、トマスといふ二人の男兒



を設けたのであつたが、一六五五年にはベッドフォードに家を移した。その年、敬虔な妻は他界の人となり、ギッフオドも亦世を去つた。バニヤン自身も健康を害し、肺患の惧があつたさうであるが、頑丈な身體をもつてゐたので病を克服した。一六五五年、ギッフオドの死後、バニヤンは執事チャイルドの一人に選ばれ、一六五七年にはその教會の説教者としての資格を認められた。職業は猶鑄掛屋を續けてゐたけれども、説教者としての盛名は次第に擴まつて行つた。

ギッフオドの影響はバニヤンの言葉遣や表現の上にも現はれたと思はれる。それが彼の説教者としての才能を自覺せしめたことは言ふまでもないことであるが、その文才を導く動機となつたことも亦疑を容れない。グリッフィスの傳の附録になつてゐるギッフオドの牧會書簡(Pastoral Letter)を讀むと、聖書以外に彼の文體に影響を與へたものを發見することが出来る。彼は又、この宗派に入つてから後幾程もなき頃にルッタアの書いたガラテヤ書註解の英譯(Commentarie of Master Doctor Martin Luther upon the Epistle of S. Paul to the Galatians, 1516)を讀み、キリストの死に依る救、即ち『主は我らの父なる神の御意御心に従ひて、我らに今の惡しき世より救ひ出さんとて、己が身を我らの罪のために與へたまへり』(ガラテヤ書一、四)といふ信仰の祕義を體得した。しかしながら、それは彼の新生に於ける第一歩であつて、

『天路歷程』に於ける十字架と同じやうに、巡禮の旅の始まるところに立つてゐた。「死の影の谷」や「疑惑の城」に至るまでの艱苦困難は猶その後に残されてゐたのである。

清教徒とクウェイカアズとはいつも同じやうな道を歩きながら、屢々衝突を免れなかつた。

一六五六年、ジョージ・フォックスの巡回傳道に従つてクウェイカアズの或者がベッドフォードシアを訪れ、市場の十字標の下でその證言を發表するや、バニヤンは直ちにこれと論争を始め、ギッフオドのあとを繼いだジョン・バートンその他の同人と共に市場やセントポールズ・チャーチやその他の場處で激烈な議論を闘はした。この年、バートンの書簡を添へてニウポート・バグネルより出版した『福音の眞理闡明』*Some Gospel Truths Opened According to the Scripture*はこの論争の結果であり、バニヤンの最初の著作である。バニヤンはやうやく二十九歳、バートンの推讃には地上の大學より選ばれた者ではなく、天上の大學、キリストの教會より選ばれた者、神の恩寵に依つて三つの天上の學位、即ちキリストとの結合、聖靈の受膏、悪魔の誘惑に對する體験をもつた者であり、その信仰の健實と、神聖な回心と、福音を説教する能力は、人の助力に依らず、主の聖靈に依る者である、とある。クウェイカアズの方からはエドワード・パロウといふ二十三歳の青年が『平和の福音』*The Gospel of Peace, contended*

*for in the Spirit of Meekness and Love against the secret opposition of John Bunyan, a professed minister in Bedfordshire* といふ論駁を發表し、バニヤンは又それに答へて『福音の眞理闡明擁護』 *A Vindication of Gospel Truths Opened* を發表した。パロウも亦、クウエイカアズの中の錚錚たる論客であり、後には迫害の下に囹圄の人となり、殉教の死を遂げたといふやうな、バニヤンには寧ろ近い性格の人物であるが、當時は兩者共に年が若く、熱情に満ちあふれてゐたから、論難攻撃は凄まじい勢で行はれ、殆んど詬罵をかはすものとなつた。議論の中心は清教徒の尊重する聖書の權威とクウエイカアズが究竟の據りどころとする「内在の光」、即ち、靈感の權威との上下を問ふものであり、清教徒の立場より言へばクウエイカアズは結局キリストの歴史的實在を否定すると考へたのである。しかしながら、バニヤン自身のビニリタニズムにはクウエイカアズの神秘思想によほど近いものがあり、クウエイカアズも亦聖書を尊重しないのではないから、このやうな偶然の機會でもなければ論争には立ち至らなかつたのではないかと思はれる。それはとにかく、この論争に端を發してバニヤンは文學の中にもその領域があることを發見した。一六五二年に刊行した『地獄の嗟嘆』 *A Few Sighs from Hell, or the Groans of Damned Soul* は「富める人とラザロ」の喩言を解釋したものである

が、地獄に滅び果てた靈魂の苦患を描くにあたり、幼年時代よりその心を悩ました想像力は縦横に發揮せられて迫眞の趣を具へ、バニヤン獨特の素朴なヒューマアと雄勁で、また質實な言葉遣は早くも後に書かるべき秀什の片鱗を示してゐる。一六五九年には『律法と神恩の教理解説』 *The Doctrine of Law and Grace Unfolded* には『天路歷程』の中心思想ともいふべきキリストの人格と行に依る救の眞實が力説せられてゐる。この書物の巻頭に讀者へ宛てて書いた書簡の中、バニヤン自らその素性を述べたところには、『私はアリストトルやブレイトウを學ぶために學校へ行つたことがなく、極めて卑賤な境遇にある私の父の家で、貧しい田舎者の仲間の間に育てられた。』 *I never went to school to Aristotle or Plato, but was brought up at my father's house in a very mean condition, among a company of poor country-men.* といふ有名な一節がある。

一六六〇年五月、チャールズ二世はドウヴァに上陸して王政復古の代となり、清教徒政府は没落した。チャールズ二世がオランダのブレエダから發布した宣言の中には信教の自由が認められてゐたのであるが、清教徒に對する人心の反動と社會情勢の不安は議會を動かしてこの宣言を撤回せしめ、國教會以外のあらゆる宗派を絶滅せしめようとする政府の方針が露骨に表明

せられた。教管区内の教會に出席を拒む者は罰金を課す、非國教徒の集會に臨む者は法令に服従するまで監禁する、三個月を経過しても服従しない者は國外に追放する、王の許可なくして追放より歸國する者は重罪人として死刑に處す、といふのである。これらは皆、エリザベス女王の時、國教會を保護するために設けた法令を復活させたものである。國教會は又宗教上の禮拜に於ける『祈禱書』(The Book of Common Prayer)の使用を強要し、ベッドフォードでは一六六〇年にこの主旨が公布せられた。

危機は迫つた。福音宣傳者ジョン・バニヤンの名は中部諸州の各地に鳴り響き、ケイムブリッヂシアのメルドレスやベッドフォードシアのイエルデンでは教管区の教會で説教したことがあつた。イエルデンの教管区では聖誕祭の日、聖職に任ぜられてゐない、鑄掛屋が講壇の説教を許されたといふことに對して、區民から抗議が出た位である。バニヤンが勞働階級の者であり、その説教が純情素朴であると共に、塵々激烈なものであり、殊にその宗派以外では公認せられた牧師や説教者ではなく、納屋でも、私宅でも、森の木蔭でも、およそ彼と共に祈り、彼の話を聴く者の集るところでは到るところで説教したといふことには、この頃の政府當局が最も警戒してゐた叛亂煽動者と同一視せられる危険がなかつたとは言へない。

一六六〇年十一月十二日、ベッドフォードの南方十三マイルのところにあるハーリントン近郊のロウウア・サムゼルといふ小さな村でバニヤンは終に逮捕せられた。彼はその村のある私宅で行はれる禮拜を司ることになつてゐたのであるが、逮捕状が出されたといふことは一二時間以前に分つてゐたので、逃亡の餘裕があつたけれども、バニヤンはそれを利用しようとは思はなかつた。ただひとり、牧草の原の中を歩きながら、若しこの際彼が逃亡したならば薄志弱行の信徒に與へる影響はどうであらうかといふことを熟慮した上、その家に歸つて猶一時間の間、おもむろに會衆の集まるのを待ち、平生のやうに禮拜を始めた。祈禱が終り、演題の聖句が指定せられ、會衆は聖書を開き、バニヤンはまさに口を開いて語らうとするところへ警官が闖入した。バニヤンは訣別の言葉を述べたいと言つて暫時の猶豫を請ひ、このやうなことのために苦しむのは恵である、迫害する者となるよりも迫害せられる者となつた方がよい、盜賊や殺人者として苦しむよりもクリスチャンとして苦しむ方がよい、と言つた。警官や捕吏が退屈して邪魔を入れたため、訣別の辭は中絶し、バニヤンは引立てられた。唯、州長官の都合で、その夜はある友人の家に泊り、翌日その友人と共に警官の許に出頭、更にフランス・ウインゲイトの家に連れて行かれた。ウインゲイトが逮捕状を出したのはバニヤンに叛亂煽動者の嫌疑を

抱いたためであつたと思はれる。ところが本人に會談して見ると、一向そのやうな様子がなく、唯説教をするといふだけのことなので、ちよつと途方に暮れた。しかしながら、非國教徒の會合で説教をすることは新しい發令に依つて十分罪になり得るのであるから、何とかしてそれを思ひ止ませようとしたのであるが、その點はパニヤンの方が承知しない。それならば次の巡回裁判で判決を受けなければならぬといふことになり、收監狀を作つてベッドフォードの監獄に送つた。この間、ウインゲイトの舅でハリントンの牧師であつたり、リンドン博士に罵倒せられたり、その義弟でベッドフォードの牧師をしてゐたウィリアム・フォスタアの倭辯に依つて言葉巧にその意を拒げるやうに仕向けられたが、パニヤンの鐵石の意志は如何ともすることが出来なかつた。かうして七週間を経過した後、一六六一年一月、ベッドフォードのハーン祈禱堂で巡回裁判が行はれたのであるが、裁判官は豫て清教徒に反感をもつてゐた地方紳士であり、殊に裁判長は後年宗教統一令 (Act of Uniformity) を起草したサー、ジョン・ケリングであつた。ケリングは苛厲峻烈の評判の高い人間であつたが、パニヤンに對しては寧ろ好感をもつてゐて、その答辯に合槌を打つたことさへあつたやうである。唯、肝腎の點、即ち説教を止めるか、止めないかといふことになる、パニヤンは對手の態度如何を問はず、一步も後へ引かなかつた。

『若し今日出獄するならば、神の助を得て、明日福音を説くでせう。』“...if I was out of prison to-day I would preach the Gospel tomorrow, by the help of God.”と彼は斷言してゐる。そこで、再びベッドフォードの監獄に送られた。法令に依つて三個月の猶豫が與へられ、その期限の切れる頃には、後にベッドフォードの市長となつたポール・コップが、當時は治安判事の秘書として監獄を訪れ、情を傾け、言葉をつくしてパニヤンを説得しようとしたけれども、その志を翻すことが出来なかつた。『貴下、法律は私に服従の二つの途を具へてくれました。その一つは私の良心に於いて、私がしなければならぬと信じることを能動的に行ふことです。又、私が能動的に服従することの出来ないところでは、その時は身を横たへて人人が私に對して行ふことを甘受するつもりです。』“Sir, the law hath provided me two ways of obeying: the one to do that which I, in my conscience, do believe that I am bound to do, actively; and where I cannot obey actively, then I am willing to lie down and to suffer what they shall do unto me.”といふのがパニヤンの最後の返答であつた。この期限を過ぎても法令に従はなければ國外に追放せられる。その上猶勝手なことをすれば死罪に問はれないとも言へない。彼は殉教を覺悟してゐたのである。

パニヤンの第二の妻エリザベスの活動はこの頃から始まる。再婚の年月は分らないが、逮捕の時より一年程前であり、四人の小さい子供の世話を見て貰ふために娶つたものと思はれる。この人は當時妊娠中であつたが、やがて死兒を生んだ。それでも、あらゆる困難に屈せず、主人パニヤンの解放を求めて東奔西走した。或時はロンドンへ行き、單身歎願書を携へて上院を訪れ、高官の審問に答へた。一六六一年八月、治安判事サア、マシウ・ヘイルの巡回裁判があつた時には三度直訴して法律上の正しい裁判を求めた。サア、マシウ・ヘイルはこの若い妻の健氣な行に同情したけれども、地方の役人が邪魔を入れた爲にどうすることも出来なかつた。パニヤンが追放を免れたのはこの年四月、チャールズ二世の即位と共に發令せられた大赦令の爲であるが、その罪は大赦の除外例に當るといふので、自由の身となることは許されなかつた。一六六二年の春、もう一度、その再度の審問を要求するための努力が傾けられたけれども、これも亦徒勞に終り、かくて、一六七二年に至るまで、十二年間の獄中生活が決定的なものとなつた。一六六六年、悪疫の歳に一時釋放せられたといふ説はジョン・ブラウンその他の傳記者の認めるところであるが、その後の研究に依つて否定せられてゐる。

パニヤンが監禁せられた牢獄はベッドフォードの市を流れるウーズ川の橋のほとりに立つてゐ

た小さな留置場であつたといふことが信ぜられてゐたが、少くともこの十二年間はベッドフォードのハイ・ストリートとシルヴァ・ストリートの交る角にあつた州監獄に入つてゐたのであり、それも階上のかなり広い部屋であつた。パニヤンはここで家族の者や友人と會見することを許され、又、獄中で知り合になつた人人を集めてその信仰を語ることが出来た。時期に依つては監禁の厳しいことがあつたけれども、屢々外出を許され、或時期には清教徒の集會に出席を續けてゐたこともある。家族の生計を考へなければならなかつたので、長い組紐のやうなものを作ることを覚え、それを行商人に賣つて金を作つたといふ。『年一年と、それに較べるならばこの島に現今發見せられる最も酷い牢獄でも宮殿である所の土牢ゲルボウの中に辛抱強く彼は横たはつてゐた。』“Year after year he lay patiently in a dungeon, compared with which the worst prison now to be found in the island is a palace.”とサムローレーの言葉は、それ故に、事實に相違してゐる。唯、その家族、殊にパニヤンが滿腔の愛を傾けてゐた盲目の女メアリがどうなるかといふことを思ふと、さすがに斷腸の念にたへなかつたといふ。

十二年の獄中生活の中、初の六年間はパニヤンの思想が最も敏活に働いた時代である。『有益なる瞑想』*Profitable Meditations* (一六六一年)、『祈禱論』*A Discourse Touching Pray-*

er (一六六三年)、『キリスト教徒の行状』*Christian Behaviour* (一六六三年)、『四つの最後の  
事』*Four Last Things* (一六六三—五年)、『ヘバルとゲリジム』*Hbal and Gerizim* (一六  
六三—五年)、『死者の復活』*Resurrection of the Dead* (一六六五年)、『獄中の瞑想』*Prison  
Meditations* (一六六三—五年)、『聖都』*The Holy City* (一六六五年)、『神恩無量』*Grace  
Abounding* (一六六六年)が相次いで著作せられた。この中『有益なる瞑想』、『四つの最後の事』  
の『ヘバルとゲリジム』、『獄中の瞑想』は詩であり、その他は散文である。バニヤンの詩に就  
いては後に言及する。『祈禱論』は當初『靈の祈禱』*The Prayer in Spirit* と題したもので、  
イギリス國教會の『祈禱書』の使用に對して反對の意見を述べたものであり、『キリスト教徒  
の行状』はキリスト教徒の實踐道徳、夫婦、親子、主僕の義務を卒直に解説したものであり、  
『聖都』は「ヨハネ黙示録」の最後の章に於ける新エルサレムの幻想を説明しながら、バニ  
ヤンの心に描いた神の都 *Civitas Dei* の社會と教會の状態を述べたものであり、この『聖都』  
とその次は出版した『死者の復活』は共に獄中彼の周圍に集まつた同人のために述べた説教を  
原にしたものであるといふ。これらの散文はいづれもバニヤンの思想を理解する上に重大なも  
のであるが、最後に出版せられた『神恩無量』は『天路歷程』と相並んで彼の全著作の中に輝

やく一大傑作である。正式の表題は『罪人の長に滿ち溢るる神の恩寵』*Grace Abounding to  
the Chief of Sinners* である。序文を見ても分るやうに、本來、教會の書簡を書くやうな心も  
ちで、信徒のために筆を執つたものであるが、その内容は一種の自敘傳のやうなものになつて  
ゐる。『天路歷程』に於いて寓意の形をとつてゐるものがここでは盡く切實な經驗であり、そ  
の經驗の深刻なことは古今の自敘傳にあまり多くの匹儔を見ない。ただ、バニヤンの重視した  
ものは常に精神上の經驗であつて、直接それに関係のある事でなければ、妻の名や事件の年月  
すら記載してゐない。

『神恩無量』を書いてから後の六年間にはバニヤンの著作が殆んどなく、出獄の年、即ち一六  
七二年に『わが信仰の告白』*Confession of my Faith* と『信仰に依つて義とせらるる教理の  
辯』*A Defence of the Doctrine of Justification by Faith* を出版した。前者は彼の信仰が福  
音書に結びついたものであり、力の及ぶ限り、すべての人と平和を保つための努力を伴ふもの  
であることを述べ、根本の精神に於いて相通するものがあれば宗派や教條を超越した信仰の上  
に立つ者であることを告白してゐる。ジョン・ブラウンはこれに依つて釋放せられることを望  
んだのであらうと言つてゐるが、グリッフィスも言ふやうに、バニヤンの信仰が次第に普遍的

なものとなり、清教徒の偏見から蟬脱するやうになつたことは『天路歷程』が數行を改めたまままでカトリック教徒の間にさへ愛讀せられてゐることを見ても分る。後者は一六七一年の初の頃に出版せられたノートヒルの牧師、後にグロスタアの監督になつたレヴレンド、エドワード・ファウラーの書物『キリスト教の計畫』*The Design of Christianity* を反駁したものである。パニヤンはファウラーの所説が福音的宗教の基礎を覆へすものであると思ひ、章を逐うて難詰した。著者とその書物に對する攻撃は毒舌辛辣を極め、『わが信仰の告白』に現はれた一面とは全く趣を異にした性格の一面を示してゐる。この獄中、彼の愛讀した書物は聖書とフォックスの『殉教者列傳』*The Book of Martyrs* であつた。

一六七二年、チャールズ二世はキャバル〔五名の外交委員〕の進言を用ひて、フランスの歡心を求め、カトリック教會に歸依することを約束した上、イギリスの國民を籠絡するための一手段として信教自由令(Declaration of Indulgence)を發令した。信教の自由は無論國教以外の諸宗派を認めることであるけれども、チャールズ二世の眼目はその中にカトリック教會を入れることであつた。パニヤンはこの法令に依つて出獄を許されたのである。免罪狀はこの年九月十三日の日附になつてゐるが、既に一月二十一日にはベッドフォードの非國教徒の教會の牧師

に任命せられ、五月九日には説教を許可せられてゐる。その教會といふのは會員の一人の邸宅にある果樹園の中の納屋であつた。ここを中心としてパニヤンは再び傳道を始め、ベッドフォードシアでは定期巡回説教の計畫を實行し、もとより戲談であつたが『パニヤン監督』"Bishop Bunyan" の名に依つて知られた。この頃、パニヤンの感化を受けた娘アグニス・ポームントが父の反對を押切つてその説教を聞きに行き、途中でパニヤンの馬に乗せて貰つたところをその父に見つけられて、家から閉め出され、數日後歸宅して見ると、父は死んでゐたといふやうな事件があつた。一方では著作の仕事も忙しくなり、一六七三年から一六七四年までの間には『水の洗禮に關する判断の相違』*Differences in Judgment about Water Baptism* 『平和にして眞實なる教義』*Peaceable Principles and True*。一六七五年には『暗闇の中に坐る者のため之光』*Light for Them that Sit in Darkness* が出版せられた。

「信教自由令」は發令後一年にして撤回せられ、一六七三年には官吏の國教會に從屬することを強要する「宣誓令」"Test Act" が發令せられた。ベッドフォードではこの年三月四日、曩に佞

辯を以てバニヤンの志を奪はうとしたウィリアム・フォスタアを始め、十三人の法官が署名した逮捕状が發せられて、バニヤンは再び獄裡の人となつた。この時はウーズ川の橋のほとりにあつた留置場に置かれたといふことであるが、これにも異説がある。この監禁は六個月で終つた。二人の證人が向後適當な時期に國教會に歸順せしめるといふ保證を入れ、ベッドフォドシアの監督トマス・パーロウの自由裁量に依つて釋放せられたのである。

バニヤンの文筆はこの第二の監禁中も活潑に動いてゐた。『無智なる者のための教』 *Instruct-ion for the Ignorant* 『神恩に救はれて』 *Saved by Grace* 等の小著作が書かれたことは確實であるが、その或ものは著作の時期が明らかでない。ジョン・ブラウンはその次に書かれたものが『窄き門』 *The Strait Gate* であり、『天路歷程』第一部の序詩の始に『この福音の世の／聖徒らの道と競ひを書く中に』 *“writing of the way / And race of saints in this our gos-pel day.”* と言及せられてゐるのは『窄き門』のことであると言つてゐるが、グリッフィスは『天の走卒』 *The Heavenly Footman* であるといふ。若しさうであるとすれば序詩の中の“race”は『競走』『競ひ』であつて『族』或は『一生』ではない。(コリント前書九・二四参照) 『天路歷程』 *The Pilgrim's Progress* 第一部(一六七八年)はこの獄中に書かれた著作の最大

なるものであるのみならず、バニヤンの全作品の中の最大なるものであり、その代表作である。

*This gaol to us is as a hill*

*From whence we plainly see*

*Beyond this world, and take our fill*

*Of things that lasting be.*

この獄 われらには丘にも似たり、

そこよりぞこの人の世の彼方をも

あきらかにわれらは眺め、さらに取るなり、

とこしへに在るべきものを、心ゆくまで。

と、その詩の一つの中に自ら述べてゐるやうに、十二年間の長い歲月、幽囚の窓に靜思默想した結果、彼の心は今やその一生の閱歷を客觀的に眺め得るところに到達してゐた。「滅亡の市」から出て行くクリスチアンの姿は彼自身の姿であると共に罪を自覺したすべての人のそれであり、クリスチアンが旅の道中に邂逅するさまざまの出來事はさういふ人の一生に起り得る禍福災祥の象徴である。「絶望の沼」や「虚榮の市」はベッドフォドシアの風景であると共にすべ



ての人の精神上の閱歷の中に存在する風景である。ウァールドリ・ワイズマンやバイ・エンツはバニヤンの周囲に見る社會の者であると共にあらゆる社會の要素を成してゐる。アボルオンや巨人デイスベアでもこれを人間の經驗する苦闘や煩悶の象徴として考へるならば、あらゆる時代とすべての場處に於いて切實さを失はない。ここに至つてバニヤンの天才は宗派を超越し、時代を超越した。『天路歷程』の宗教は人が靈魂を有つてゐることを、又その行動に對して責任のあることを信じる限り、いつも、あらゆるところに存在しなければならぬ宗教である。それで、かつては天より降つたマンナのやうに食られた神學上の大冊がエヂプトのミラの子供のやうに書架に横たはつてゐる時、この書物があらゆる氣立のよいイギリスとアメリカの子供の思想と記憶を動かし、又、文學の教へ得るすべての知識をそなへた成年カトナは、猶且つクリスチアンの奇遇冒險をユリシースやイーネアスの奇遇冒險と同じやうに魅力のあるものであると思ふのはこの理由に依る。彼はそこに彼自身の姿を、百代を重ねて猶愉らざる彼自身の本性の親しく見慣れた顔かほ貌を見るのである。時はその興味を損ふことが出来ない、知力の進歩もそれを經驗に對して眞なるものであることを熄めしめることが出来ない。』*The religion of The Pilgrim's Progress is the religion which must be always and everywhere, as long as man believes*

that he has a soul and is responsible for his actions; and thus it is that, while theological folios once devoured as manna from Heaven now lie on the bookshelves dead as Egyptian mummies, this book is wrought into the mind and memory of every well-conditioned English or American child; while the matured man, furnished with all the knowledge which literature can teach him, still finds the adventures of Christian as charming as the adventures of Ulysses or Aeneas. He sees there the reflexion of himself, the familiar features of his own nature, which remain the same from era to era. Time cannot impair its interest, or intellectual progress make it cease to be true to experience."

(James Anthony Froude) とあるフルードの評語は蓋し正鵠を得たものであらう。

『イエス・キリストに來りて迎へられよ』*Come and Welcome to Jesus Christ* は一六七八年に、『神を恐るる心を論ず』*Treatise of the Fear of God* は一六七九年に出版せられた。一六八〇年に世に現れた『バッドマン氏一代記』*The Life and Death of Mr. Badman* はバニヤンの著作の中、最も特色のあるもので、文學史上の意義より言へば、或は『天路歷程』と『神恩無量』以外のすべての作品を凌駕するものであるかも知れない。これは寫實小説といふもの

が意識せられない時代の寫實小説であり、デフォーのそれと共にイギリス近代小説の先驅をなしたものと見ることが出来る。ミスタア、ワイズマンとミスタア、アッテンテューヴの對話の中に展開せられるミスタア、パッドマンの一生は良家の子として生れ、善良な主人の許に奉公人となつた青年が次第に悪人の本性を示して、道徳的には下へ下へと没落しながら、一かどの才子として世間を韜晦し、安樂な最後を遂げるまでの物語。名詮自稱を別とすれば寓意的なところや勸善懲惡のやうなものが微塵もなく、王政復古期の社會と俗人を手にとるやうに描いてゐるが、最後に、『死にさまは如何でした？ 死は強く當りましたか。それとも樂に死にましたか、靜かに？』『小羊のやうに靜かに。』“Pray how was he in his death? Was death strong upon him? Or did he die with ease quietly?” “As quietly as a lamb.” とあるのを読むとぞつと身に沁みわたるやうな戰慄を覺えしめる。その後二年、一六八二年に出版せられた『聖戰』*The Holy War* はそれとは又うつて變つた寓意文學であり、その構想に於いてはミルトンの『失樂園』にも比較せらるべき清教徒の思想が表現せられてゐる。物語の筋はマソウル(人の靈魂)といふ都城を中心としてその主君シャダイの軍勢とダイアボラスを巨頭とする叛徒の戰爭、攻略と奪回と、一勝一敗の推移を述べ、シャダイの勝利とマソウル市民の

天上移住に至るまでの推移を述べたものである。『實らざる無花果の樹』*The Barren Fig Tree* も亦この年に出版せられた。

『靈魂の偉大』*The Greatness of Soul* と『良心の問題解決』*A Case of Conscience Resolved* は一六八三年に、『キリスト教の聖なる生活と美しき』*A Holy Life and Beauty of Christianity* と『時宜に適當する勸め』*Seasonable Counsel* は一六八四年に、『罪に對して目を覺ますべく振ひ立つための警告』*A Caution to Stir up to Watch against Sin* と『パリサイの徒と收稅吏』*The Pharisee and the Publican* と『七日目の安息日の本質と永續性』*The Nature and Perpetuity of the Seventh-day Sabbath* は一六八五年に出版せられた。これらは皆バニヤンの滾滾として盡きざる宗教上の體驗と瞑想より生れた小著作であり、その或ものは説教のために用意したものである。

一六八五年には又『天路歷程』第二部が出版せられた。クリスチアンが残した家族の者、クリステイアナとその四人の子供及びマーシーといふ娘がクリスチアンの通つた道を経て巡禮の旅に上り、クリステイアナが「天の都」に辿り着くまでの物語である。すべての續篇がさうであるやうに、第一部よりも低調であるのは止むを得ない。しかしながら、これは『イリアス』

に對する『オデュッセイア』である。敘事詩の壯大は第一部にあるけれども、小説の興味は第二部の方に發見せられるであらう。醫者のスキルやオネスト老人や、殊にフィーブル・マインド、レディ・トウ・ホールト、デイスボンデンシーといふやうな人生の弱者を登場せしめ、グレイト・ハート、ヴァリアント・フォートルースのやうな勇敢な人物でさへ、何となく日常われわれの周圍に存在し得る者であるやうに思はれる。第一部に於ける「死の影の谷」や「疑惑の城」の悲壯美を發見することは出来ないが、「疊惑の地」の凄慘な趣は第二部の方が優れてゐる。

『うなゐの巻』 *A Book for Boys and Girls* は童話集のやうなもので、一六八六年に出版せられた。バニヤンは生涯を通じていつも詩を書いてゐたやうである。第一の監禁の間にも數篇の詩集を出版したことは既に述べた通りであるが、『天路歷程』の第一部と第二部にはそれぞれ長い序詩がついて居り、物語の間にも事につは、折にふれてさまざまの詩や歌が挿入せられてゐる。その或ものは極めて荒けづりなもので、詩といふほどの價值のないものであるが、又そのいづれのものにもバニヤン一流の獨創力と簡明直截な思想が表現せられてゐることを否むことは出来ない。『天路歷程』第二部の中の敘情詩のあるものなどは上乘の作とせられてゐる。

そこには又、シェイクスピアの餘韻と考へられるものもあり、ジョージ・ハーバートの着想を偲ばしめるものがないでもない。序詩などの論述の部分を読むと、これが洗練せられたならばドライデンの詩のやうなものになるのではないかとも思はれ、時代の雰圍氣といふものは争はれないものだと思へずにはゐられない。この童話集の中に入つてゐるものなどはバニヤンの詩想が最も單純な形で表現せられてゐるだけに、興味も多く、譬喩、教訓は別としても、自然の觀察や人情の機微を穿つたものに秀什が尠くない。

散文の方も又、引續いて述作を續けられ、逝去の年、一六八八年には『救はれたるイエルサレムの罪人』 *The Jerusalem Sinner Saved*, 『執成人としてのイエス・キリスト』 *Jesus Christ as an Advocate*, 『神の宮』 *The House of God*, 『命の水』 *The Water of Life*, 『ソロモンの神殿靈化』 *Solomon's Temple Spiritualized* が出版せられ、『神の受け容れたまふ生贄』 *The Acceptable Sacrifice* と『天の走卒』 *The Heavenly Footman* は歿後出版せられた。(五百幾篇といふバニヤンの著作を盡く數へることは出来ない。ここには唯その重要なものだけを擧げたのである)。

バニヤンの晩年十六年間は彼に託された教會の牧師、又、非國教徒の中の有力な牧師として

比較的靜穩な境涯の裡に經過した。ベッドフォードの家は小さいものであつたが、萬事に不自由のないものであり、古い家具や貴重な器具など、多くは彼を隨喜する人たちの贈物が集まつてゐた。年に一度はロンドンを訪れ、バプティストの教會で説教した。ロンドン市長サー・ジョン・ショーターの雇牧師に任ぜられたといふのは傳説であるけれども、その盛名的一端を示すものと言ひ得るであらう。最初の傳記者、チャールズ・ドウの記すところに依ると、一日の豫告で説教する時にも會衆は堂に溢れたいふことであり、暗い冬の朝、而も週日の午前七時といふ時にすら、バニヤンの説教を聞きに集まつた者が千二百人あつた。安息日に場末の會堂に集まつた者は三千人もあつて、半数は中に入ることが出来なかつたといふ。オウルド・ブロード・ストリートのビナス・ホールに集まつた商人たちは火曜日毎に宗教家の講演を聴くことになつてゐたが、バニヤンはベイツ、ジョン・オウウエン、バクスタア等斯界の名士のあとに招かれて一場の説教を試みたことがあつた。ジョン・オウウエンのやうな學者が無學な鑄掛屋の説教を聴いたといふことについてチャールズ二世が驚歎の意を現した時、彼は、あの鑄掛屋の聴衆の心に徹する力を得るためならば、學問一切を棄ててもよい、と答へたといふことである。ベッドフォードを去つてもつと顯要な地位に就くことを薦められたことも一再ではなかつたが、さ

ういふ誘惑には決して應じなかつた。

この間、イギリスの政治は極めて不安であり、社會は動亂と革命の危機に瀕してゐた。内閣は屢々更迭した。一六七八年にはタイタス・オーツの虚構の流説が行はれてカトリック教徒の間に大陰謀があるといふ噂が立つた。一六七八年から一六八〇年までの間にはチャールズ二世の王嗣問題に絡んで物情騒然たる状態となり、一六八〇年十一月には「廢嫡令」(The Exclusion Bill) が下院を通過した。上院では否決せられたが、事態は内亂にもなりさうな勢で、一六八一年一月の國會は解散せられ、三月オックスフォードに召集せられた國會も亦、開會と同時に解散せられ、七月には廢嫡運動の張本人シャフツベリが叛逆罪の罪の下にロンドン塔に幽閉せられた。一六八二年にはライ麦小屋の陰謀といふことがあつて弑逆の計畫が發覺した。一六八五年はチャールズ二世が崩去、その弟ジェームズ二世が位に即き、やがて「廢嫡運動」以來王位を覬覦したモンマス公の叛亂が起つた。七月、セツチモアの戦でモンマス公は敗れたが、その味方をした者には清教徒があつたといふので、迫害は酷烈を極め、それと共にジェームズ二世のカトリック教會をイギリスに確立しようとする野心は愈々露骨に現れて來た。一六八六年に「宣誓令」の廢棄が拒否せられ、宗門委員會 (Ecclesiastical Commission) が制定せられ

た。一六八二年にはオックスフォード・モードリン學寮の研究學徒が放逐せられ、カトリック教會の進出を目的とする「信教自由令」が再び發令せられた。一六八八年には國教會の僧徒を擧げて「信教自由令」に反對の運動が起り、ジェームズ二世は七人の監督を監禁するといふ高壓手段に出たが、國民の攻撃にたへかねてこれを釋放し、結局、孤立無援の窮地に陥つてフランスに逃亡した。そのあとに迎へられたのがジェームズ二世の女メアリとその夫オレンジ侯ウイリアムである。

かういふ時代であつたから、比較的靜穩であつたとは言へ、パニヤンの説教の旅は全く危険のないものではなかつた。レディングを訪れる時、手に長い鞭を持ち、荷馬車の馭者に身を扮して、發覺を免れたといふ傳説がある。一六八五年、迫害は愈々激しく身邊危急を告げた時には財産一切を擧げて妻のエリザベスに譲渡するといふ證書を作製した。「この證書或は遺言狀の最初に彼は猶『鑄掛業』"Brasier"と記してゐる」。これらの事實はその晩年が必ずしも無事安穩なものではなかつたことを示すものであるが、それにも拘らず、大した迫害に逢はなかつたのは彼が世俗的な野心や政治上の問題には全然關心をもたなかつたからである。ジェームズ二世はパニヤンの盛名を利用して、ベッドフォードの市政改革を敢行しようとしたことがあるといふことであるから、若し彼が一時の權力に誘惑せられるやうな者であつたらば、災厄を免れることが出来なかつたであらう。

一六八八年十一月、オレンジ公ウイリアムはトーベイに上陸、十二月、ロンドンに入城、「無血革命」が成就して新教徒は再び日の目を見たのであるが、パニヤンはそれを見ることが出来なかつた。この年八月、説教のために馬上ロンドンへ行く途すがら、西の方レディングに立ち寄り、豫て父の不興を買つてゐた若い隣人のために、その父を訪れて懇切に説諭した結果、親子の仲は直り、パニヤンは再びロンドンへ馬を急がせた。ところが、その途で烈風と強雨に遭ひ、全身びしょ濡れになつてホルボーン・ブリッチの橋畔に住んでゐた友人、食料雜貨商ストラッドウィツクの家に着いた時には疲労と病熱で發汗してゐたのであるが、十九日の日曜日には病をおしてホワイトチャペルの近くにあるガマンといふ人の會堂で説教し、ストラッドウィツクのところへ歸つて來た時にはよほど重態になつてゐた。かうして二週間にならない中、その月の三十一日の夜、この友人の家で息を引きとつたのである。最後の言葉はクリステイアナが死の川を渡る時の言葉を想起せしめる。『受け容れたまへ、御前にまゐりませう。』"Take me, for I come to Thee"と云ふのがその言葉であつた。行年六十歳であつた。遺族は先妻の三人

の兒と妻のエリザベス、又エリザベスの兒エリザベスとセーラであつた。盲目の長女メアリは成人したけれども父よりも先に世を去つた。長男ジョンは鑄掛屋を受け継ぎ、父の死後、ベッドフォードの教會の有力な會員となつた。ジョウゼフはノッティンガムに落着いて國教會に歸依した。女たちはそれぞれ然るべきところへ片付いた。未亡人エリザベスは一六九一年に世を去つた。『彼は背が高く、肥満ではなかつたが、骨組がしつかりとしてゐた、多少赤ら顔で、眼が輝いて居り、古いイギリスの流行に従つて上唇の上に髭を生やしてゐた。髪の毛は赤味がかかつてゐて、晩年には白髪を混へてゐた。鼻は格好よく坐つてゐて、垂れ下つたり、曲つたりしてゐなかつた。口はかなり大きく、額は多少高く、着物はいつも質朴で、かつ目立たないものであつた。』“He was tall of stature, strong-boned though not corpulent, somewhat of a ruddy face with sparkling eyes, wearing his hair on his upper lip after the old British fashion; his hair reddish, but in his latter days had sprinkled with grey; his nose well-set, but not declining or bending, and his mouth moderately large, his forehead something high, and his habit always plain and modest.”とバンニヤンの同代人の一人は記してゐる。『彼の顔は嚴肅且つ沈着であり、その心の内在の氣分をありありと現してゐたので、見る者を承服せしめ、

神を恐るる念などは少しもないものに畏敬の情のやうなものを起させた。』“His countenance was grave and sedate, and did so to the life discover the inward frame of his heart, that it was convincing to the beholders, and did strike something of awe into them that had nothing of the fear of God.”と他の一人は記してゐる。『顔つきは嚴格且つ粗暴な氣質の者であるが、會話では穩やかで、人好きのよい者であるやうに思はれ、さし迫つた事態がそれを要求しなければ、人中で多辯を弄したり、談論に耽つたりするやうな風ではなく、決して自分の才能を自ら誇らないやうに心がけ、寧ろ自分では低い者と思ひ、自分のことは他人の判断に任せてゐるやうに見えた。』“He appeared in countenance to be of stern and rough temper, but in his conversation mild and affable, not given to loquacity or much discourse in company, unless some urgent occasion required it, observing never to boast of himself in his parts, but rather seem low in his own eyes, and submit himself to the judgment of others.”と、更に一人は記してゐる。斯ういふ記事を読むと、「マーク・ラザフォード」がバンニヤンの顔とダンテの顔を比較して一見正反對のやうに思はれるこの二人の顔は、いづれも詩人のそれであると共に、指揮を執る者、貴族、或は將帥のそれであると言つたのは

必ずしも奇矯の言であるとは思はれない。あれほど隔絶した二人の作品がいづれも深刻な體驗より生れたものであり、寓意文學であり、宗教的情操に満ちあふれたものであり、その時代のものであると同時にあらゆる時代のものであるといふことも亦、このやうな風貌の上の相違や類似と共に、素性や教養や環境の相違があるにも拘らず、尙、更に重大なところに於いて共通なものをもつてゐた爲であると思はれる。

## 二 『天路歷程』

『天路歷程』第一部は一六七八年に出版せられ、その年の秋に再版を出した。初版は八枚折本であり、再版以後のものは大抵十二枚折本であつた。翌年、即ち一六七九年には第三版を出してゐる。その後毎年二回宛版を重ね、一六八三年には第九版、一六八五年には第十版、一六八八年には第十一版を出した。一六八八年はバニヤンの逝去の年である。一六六七年、僅かに一三〇〇部の初版を出版した『失樂園』Paradise Lost が再版を出したのは九年後の一六七四年であり、それがミルトンの逝去の年であつた。この再版でさへ、當時としては異常の成功であると考へられてゐるのであるが、それにしても『天路歷程』が各版一〇、〇〇〇部を賣り盡し

ながら、作者の存生中に十版を重ねたのは目覺ましい成功であつたと言はなければならぬ。その流行は急速であり、不變であり、而も今日に至るまで持續せられたものである。一七八九年に第五十七版を出した原版は十八世紀を通じて愛讀せられたものと考へることが出来る。その後の諸版に至つては擧げて數へることが出来ない。聖書を唯一の例外として『天路歷程』程多くの版を重ねたものはないと言はれてゐる。この事實は『天路歷程』の流行が時と處に左右せられない、或本質的な價值に基くものであることを證明する。

『天路歷程』の文學的評價は、しかしながら、極めて遲遅たるものであり、二三の著しい例外を除いては今日猶決して十分に評價せられてゐるとは言へない。この點も亦『失樂園』に對する一つの對照を成してゐる。『天路歷程』も『失樂園』も、それぞれの作者の存生中には正當の評價を與へられなかつたのであるが、『失樂園』が迎へられなかつたのは王政復古期の時代的雰圍氣ともいふべきものに阻まれたからであつて、文學上の價值が顧みられなかつたからではない。ドライデンはその樂劇『無心の境』The State of Innocence に書き代へるだけの價值を認めたのである。もとより『失樂園』を一篇の樂劇に書き代へるといふことは正しい評價を與へたことにはならない。しかしながら、ドライデンがその序文の中に、『若しこれらのものを

わざわざ比較するやうな者があれば、私の方が痛み入る。原作は疑もなくこの時代の、或はこの國民の作つた詩の中、最も大いなるもの、最も高貴なるもの、又最も莊嚴なるものの一つであるから。』“I should be sorry, for my own sake, that any one should take pains to compare them together: The Original being undoubtedly, one of the greatest, most noble, and most sublime Poems, which either this Age or Nation produced.”と言つてゐるのはその文學的價値を認めてゐたことになる。ナサニエル・リーがミルトンとドライデンを比較した言葉は正しいとは言へないが、『失樂園』に對する一つの評價が與へられたことは事實である。パトリック・ヒューム以後、アディソン、ベントレー、ピアス、リチャドスン父子、ベック、パタスン、ホークレー、ニウトン等を経て、ウォーバトン、ウォートン、トッドに至るまでのミルトンの校訂と註釋の歴史は十八世紀に於ける文學的評價の發達を示してゐる。その直接に及した影響がロマンティシズムの運動の先觸となつたことはここに改めて説くまでもないことである。『天路歷程』はあれほどの賣行を示したにも拘らず、當代の文學者の中には殆んど一人としてこれに言及したものが無い。十八世紀になつてアディソンがバニヤンに言及したことはあるけれども、それはどんな作者にも讀者のないものはないといふことを言ふためであつた。

スウィフトの「若い僧職に與へる書簡」“A Letter to a Young Clergyman”の中に『私は「天路歷程」の數ページに依つて意志や知力や單純な或は複雑な觀念に關する如何なる長い論說よりも以上に慰められ、又、教へられた。』“I have been better entertained and more informed by a few pages in the *Pilgrim's Progress* than by a long discussion upon the will and the intellect and simple or complex ideas.”とある言葉は屢々引用せられるものであるが、文學上の評價であるとは言ひ難い。ドクタア・ジョンソンは『天路歷程』を正當に評價しようとした殆んど最初の文人であつた。ボズウェルの記載してゐるその言葉は次の通りである。『ジョンソンはジョン・バニヤンを大さう褒めてゐた。彼の「天路歷程」は獨創力や想像力に於いても、物語の運びに於いても、秀れたものをもつてゐる。それは又、その眞價に關する最上の證據をもつてゐた、すなはち、人類の一般的な、繼續せられた推讃である。これ位廣く賣れた本は尠いと思ふ。それは又、ダンテの詩と非常によく似たところから始まつてゐるのは著しいことである。而もバニヤンが書いた頃にはダンテの英譯はなかつたのである。彼がスペンサーを讀んだと信すべき理由がある。』

“Johnson praised John Bunyan highly. His *Pilgrim's Progress* has great merit both



for invention, imagination, and the conduct of the story: and it has had the best evidence of its merit, the general and continued approbation of mankind. Few books, I believe, have had a more extensive sale. It is remarkable that it begins very much like the poem of Dante; yet there was no translation of Dante when Bunyan wrote. There is reason to think that he had read Spenser. (James Boswell, *The Life of Samuel Johnson*, ch. XXIII—1773.)

これらの評語はすべて問題を含むものであるが、それだけにジョンソンが『天路歷程』を愛讀し、その内容に精通してゐたことが分る。ジョンソンは又『天路歷程』はすべての讀者がもつと長いものであることを望む三つの書物の一つであると言つた。或日、ジョンソンはビショップ、パーシーの女を膝の上に載せて、『天路歷程』をどう思ふか、と尋ねた。女はまだ讀んだことがない、と答へた。『讀んだことがない?』と、ジョンソンは言つた。『では、一フアージングをあげないよ。』さう言つて、その子を膝から下し、その後は見向きもしなかつた。

しかしながら、ジョンソンは例外である。十八世紀の文人の中にもジョンソン以外には『天路歷程』を文學として評價したものは殆んど皆無であると言つてよい。ヤングの言及は些細なものであり、クーバアに至つてはその名に言及することをすら憚つてゐる。

われは汝の名を言はず、かくも蔑まれたる名に依りて、  
汝の受くべき譽に對する冷笑を招かざらむために。

I name thee not, lest so despised a name

Should move a sneer at thy deserved fame.

とある『初學』 *Trivium* の一節は、これも屢々引用せられるものであるが、この場合バニヤンの名を輕蔑するものがクーバアでないことはもとより、一般庶民でもなく、當時の文學を代表する人人の社會であつたことは前後の言葉に依つて明白である。『天路歷程』の名聲は十八世紀の末葉から十九世紀の初頭にかけて文人の間に擴まつて行つた。コウルリッチ、スコット、サウジー、マコーレー等はそれぞれバニヤンの文學的地位を確立するために有力な力を添へたものである。バニヤンと同郷の碩學ドクタア、ジョン・ブラウンの『ジョン・バニヤン、その生涯、時代、及び作』 *John Bunyan, his Life, Time and Work* [一八八五年] が不朽の業績であり、フルード、ヴェナブルス、グリッフィスなどの評傳が相次いで重大な貢獻を寄與したものであると言ふまでもない。唯、ここに注意すべきことは、ステイヴンソンその他少數の例外を除き、最近に至るまでもバニヤンに最も多くの關心をもつた者は、宗敎家でなけ

れば歴史家であつたといふことである。ドクタア、ブラウンやキャノン、ヴェナブルスは言ふまでもなく宗門の人である。コウルリッチでさへ一度は神學者として讀み、一度は詩人として讀んだと言つてゐる。彼が『天路歷程』に『福音神學大綱』*Summa Theologica Evangelicae*といふ別名を與へたのは有名な話であるが、これは神學者としてのコウルリッチの批評であると思はなければならぬ。ジョン・ビー・アングスンの書目を見ても分るやうに、十九世紀を通じて『天路歷程』のことを書いたものは大部分が宗教家であり、その論文は宗教方面の刊行物に掲載せられた。その次に著しいのは歴史家である。マコーレーとフルードが、その代表的な者であるが、その他にはジェイ・アル・グリーンとヘンリ・ハラムがそれぞれの著作の中に懇切な批評を述べてゐる。無論純粹の文學的評價を試みたものが絶無ではないけれども、その多くは斷片的なものであつてさういふものとしての透察を認むべきものであり、『天路歷程』の全體に文學的評價を與へたものは極めて尠い。

『天路歷程』の流行は疑を容れないのであるが、その文學上の價值はあまり重視せられてゐない。——これはどういふことを意味するか。ドクタア、ジョンソンの謂ふ『人類の一般的に繼續せられた推讃』が文學者或は文學批評家を含んだ人類について言つたものであれば、『そ

の眞價に對する最上の證據をもつてゐた』と斷言することも出来るであらう。ところが事實はさうでなく、兩者は明確に分られたものであり、その判斷は背馳してゐるのである。極言すれば社會と文人との對立といふことになる。社會は『天路歷程』を文學として尊重し、文人は文學としての價值を十分に認めてゐない。『天路歷程』には果してその價值がないのであるか。若し、ありとすればそれはどういふところに認められるか。

『藝術作品に對する世間がその裁斷について與へる理由はあまり價值がないかも知れないが、その裁斷そのものには多大の價值がある。』“Though world's reason for its verdicts on works of art may be worth little, its mere verdict is worth much.”とエイ・シー・ブラッドレーは言つた。(A. C. Bradley, *Oxford Lectures on Poetry, Antony and Cleopatra*, p. 282) 『文學上の聲譽には僥倖といふものがない。あらゆる書物に終局の裁斷を下すものは、その書物が世間に現れる當時の偏頗な、喧燥な讀者ではなく、天使で成立つてゐるやうな法廷、賄賂を以て取り入ることも出來ず、歎願することも出來ず、威壓することも出來ない所の公衆があらゆる人の名譽に對する資格を決定する。』

“There is no luck in literary reputation. They who make up the final verdict upon every book are not the partial and noisy readers of the hour when it appears; but a

court as of angels, a public not to be bribed, not to be entreated, and not to be overawed, decides upon every man's title to the fame." とヘブソンは述べてゐる。(Emerson, *Essays*, First Series, *Spiritual Laws*.) 『天路歷程』の上に下した世間の裁断は明瞭である。それは聖書に次ぐ傑作であり、シエクピアやミルトンのそれよりも以上の作品である。何故それがシエクピア或はミルトンの作品よりも以上のものであるかといふことに就いて世間の與へ得る理由はたとひバーナード・ショーが世間の代辯人になる場合にも私どもを説得せしめないかも知れない。それに、グリアスンも指摘してゐるやうに、『天路歷程』の流行は純真な文學上の鑑賞の結果であるといふよりも寧ろ十八世紀を通じて今日まで續いてゐる福音キリスト教の傳統に負ふ所が多いのである。(Of. H. J. C. Grierson, *Cross Currents in English Literature of the XVIIIth Century*, ch. VI, p. 199.) それは認めなければならぬのである。グリアスンが、それでも世間がさういふ風に裁断したといふことは十分に考慮すべき價値がある。グリアスンの謂ふ『純真な文學上の鑑賞』とは何であるか。『福音キリスト教の傳統』は何故に『天路歷程』だけを流行せしめたか。それらの點をも考察すべきであらう。傳統の如何を問はず、世間の裁断は文學者の文學といふものに對する無言の批評である。又この批評は對手に依つては文學者の死命を制するものとなる。さういふ對手は存在しなくても文學は存在するといふことを明示するからである。

文學者の文學とは何であるか。パニヤンの時代、即ち王政復古期の文學に精通してゐるボナミー・ドブレーの言葉はこの場合の参考となり得るものであらう。

『技巧的』といふことは罵倒の辭として用ゐてはならぬ。或作品を永續的なものとするのは主として技巧であるから。文學上の作品はそれを理解させるだけの現實性をもつてゐれば

『Artificial』 should not be used as a term of abuse, since it is largely the artificiality which makes a work permanent; a piece of literature needs, to pass muster, only enough of reality to make it understandable." (Bonamy Dobrée, *Restoration Tragedy*, p. 91.)

王政復古以後のイギリス近代文學はこの意味に於ける技巧を重視した。それはヒューマニズムの文學であり、而もルネッサンス、ヒューマニズムの肯定的精神に對する否定的精神に満たされたものである。その根本的原因は思想上の背景に存在するのであるが、就中、デカルトの影響は最も重大なものであらう。

『王政復古以後の藝術の秩序と精緻と正確はデカルトの思索の整然たる規律と、その機械化

せられた宇宙の完全な状態に呼應する。それで、デカルトの影響は古人よりも「自然」と「理性」に權威を求めた、後のタイプのネオ・クラシシズムを起因する強い理由となつてゐる。「大いなる機械」としての「自然」それ自身は藝術上の「方則」を出す爲に方式化するといふやうなことを必要としなかつた。それに、彼等の発見したところでは「自然」とホウマンとは一つのものであつた。』

“The order, precision and correctness of post-Restoration art echo the methodical regularity of Descartes's thinking and the perfection of his mechanized universe. Thus Descartes's influence counted strongly for neo-classicism of the later type which looked for authority less to the ancients than to Nature and Reason. Nature herself, as the Great Machine, hardly needed any methodising to yield the 'rules' of art. And Nature and Homer were, they found, the same.” (Basil Willy, *The Seventeenth Century Background*, and *The Philosophical Quest—Descartes*, p. 89-90.)

と、ベイジル・ウィリーは言つてゐる。詩と眞實は截然として分たれ、小説は作りごと (fiction) と考へられた。韻文と散文を峻別し、小説の中に抽象小説 (abstract novel) とよ (Sydney) き客観小説の概念を發達せしめたのも、大部分はデカルトの思想や十七世紀以來の實驗科學の

影響に依るものと考へられる。それは文學に於けるヒューマニズムの當然の歸結であり、バニヤンより始まつて、デフォー、フィールディング、ディケンスといふ風に發達して行つたヒューマニティリアニズム或は人道主義の小説に並行對立してゐる。

『天路歷程』をこのやうな文學上の基準に合はせて考へると、文學としては實に缺點の多いものである。直接敘法と間接敘法が混用せられてゐる。スピーチ、ヘディングは何のためにつけたのか、殆んど意味を成さない場合が多い。對話と本文の關係などは殆んど荒けつりのままで、人稱さへ改められてゐない。正確を基準とする批評家より言へば、それだけでも擧げすべきものであつたと思はれる。綴字や用語の卑俗であることに至つては擧げて數ふことが出来ない。更に重大なものは構想上の缺點である。救はれる者はすべて丘の上の「酒り門」を通るべき筈であるにも拘らず、ホウプフルはそれを通つてゐない。すべての巡禮は死の川を渡ることになつてゐるに拘らず、フェイスフルは「虚榮の市」から直接に天に送られてゐる。「疑惑の城」に幽閉せられたクリスチアンはさういふ時の爲に與へられた巻物を用ゐずに、それまでには何の説明もない鍵(「約束」)を用ゐてゐる。第二部になるとこのやうな矛盾や撞着は一層顯著である。出發する頃には子供であつた筈のクリスティアナの長子マシウが既にその頃から年頃の娘

であつたマーシーと結婚することになつてゐる。「酒り門」はいつの間にか涼み座敷のある立派な建物になつて居り、歡樂山の羊飼の幕屋は莊麗な殿堂になつてゐる。前に一度名をあげて置いて、あとから又改めてその名を紹介するやうな場合も一再ならずある。これらの矛盾や撞着は秩序と精緻を尙ぶ十八世紀の文人の趣味には一致しないものである。アディソンが輕視し、スウィフトが文學上の評價を試みなかつたのは當然であり、ジョンソンが『獨創力や想像力に於いても、物語の運びに於いても秀れたもの』を認め、クーパーが

手際よく語られしその物語の中にうるはしきつくりごとと、  
うるはしき眞の等しく行き互れる、たくみなる、夢見る人よ。

*Ingenious dreamer in whose well-told tale*

*Sweet fiction and sweet truth alike prevail.*

と、言つたのは、寧ろ最眞の引き倒しであると思はれたであらう。

このやうな見解には一應の理がある。しかしながら、文學上の評價は唯、單に、技巧の一面から考察せらるべきものとは限らない。十八世紀の基準に依つて律せらるべきものでもない。技巧はその技巧を加へらるべき素材をもつてゐなければならぬ。どのやうに優れた技巧を以て

しても鉛を金に變へることは出来ない。如何に不完全な技巧を用ゐたものでも金は金である。

『天路歷程』の文學上の價值は技巧にあるのではなく、その素材、即ち raw material にある。ナサニエル・リーは『失樂園』が粗曠であり、ドライデンはこれを洗練して『無心の境』に作りかへたといふ意味のことを言つてゐるが、『失樂園』はこの上もなく洗練せられたものであつて、決して粗曠ではない。若し粗曠としての價值を言ふべきものがあるとすれば、それは『天路歷程』である。但し、その場合の粗曠は金曠である。それはジョン・バニヤンといふ人間の經驗である。『天路歷程』の流行はこの經驗が誠實な心を以て貫いたものであり、その結果、すべての人がそこに偽のない人間の姿を見るところに由來する。アディソンがミルトンを評價した最初の批評家であり、ジョンソンがバニヤンの文學的價值を認めた最初の文人であつたといふことは不思議ではない。ジョンソンは文學者としてはヒューマニストであつたけれども、人間としてはヒューマニズムに對立する意味に於けるヒューマニテリアニズムに同情をもつてゐた。レナアド・ウルフの言ふやうに、この意味に於けるヒューマニテリアニズムは近代民主主義の萌芽と見るべきものである。(Cf. Leonard Woolf, *After the Deluge*, ch. III.) 『天路歷程』が十九世紀になつて文人の間に行はれ、殊に民主的な思想的背景に關心をつなぐ歴史家の間に高く評價せられ

たのはこの理由に依る。グリヤソンの言ふやうに福音キリスト教の傳統がその流行を助けたとしても、それだけではマコーレーやジェイ・アル・グリーンやハラムやフルードなど、その傳統に何の關係もない人人があれほど高く評價した理由を説明することが出来ないであらう。それはとにかく、『天路歷程』の表現なり、技巧なりは、その秩序と精緻に於いては『神曲』や『失樂園』に遙かに及ばないものであるが、その素材になつてゐる経験そのものはダンテとミルトンのそれに劣るものではない。況や王政復古以後のイギリスの文學、殊に十八世紀の文學には到底見ることの出来ない純眞な生命に充ちてゐる。

『天路歷程』の文學的評價は、それ故に、技巧よりも素材、即ちこの經驗に即して與へられなければならぬ。これを一つの古泉とするならば、技巧はその形と意匠であり、經驗はその質を成す所の金屬である。古泉の鑑定をするものが、それを響かせて見て、金屬の性質を聞き分け、るやうに、私どもは『天路歷程』の言葉を驗して見ることに依つてその價值を判定すべきであらう。そこには誠實な心の鳴り音がある。多くの技巧的な文學に認められるやうな空虚な響がない。

"As I walk'd through the wilderness of this world, I lighted on a certain place,

where was a Den; and I laid me down in that place to sleep: and as I slept I dreamed  
a Dream."

『この世の荒野を歩いてゐる時、とある穴窟のあるところにさしかかり、そこに身をよこたへて眠つた。眠つてゐる中に夢を見た。』

假にこの開卷の一節をとつて考へて見やう。これは技巧的な寓意ではない。この純眞な言葉の響き、この美しい鳴り音はこれを書いた人の心から直接に迸り出でたものである。これはひとつの物語であるが、その背後には『神恩無量』の告白に劣らぬ眞剣なものが息づいてゐる。而も、何といふ落着きと確さであらう。『天路歷程』には諧謔もあり、常識もあり、哀感もある。同時に、この作者の體驗したあらゆる失敗と落膽と絶望が卒直に認められてゐる。唯、彼はそのすべてを見わたすことが出来るところに立つてゐたのである。それは彼の所謂「穴窟」であり、既に述べたやうに、彼が一生の最も重大な時期を過した牢獄である。そこから、その一生をふり返つて見た時、バニヤンの心に映じたものは一人の巡禮の姿であつた。フイレンツェを逐はれたダンテがさすらひの宿に一生の浮沈をふり返つて見た時にも同じやうな姿がまのあたりに浮び出でたのではなかつたか。

Nel mezzo del cammin di nostra vita

Mi ritrovai per una selva oscura,

Che la diritta via era smarrita.

われひとの生の路のなかごろに

ますくなる道あと絶えてなかりける

くらやみの森をよぎりて、われありき。

と、ダンテは「地獄界」の初に述べてゐる。『ダンテの詩と非常によく似たところから始まつてゐるのは著しいことである』とジョンソンが言つたのも無理ではない。兩者の類似は経験と表現の間の必然的關係ともいふべきものである。バニヤンの『天路歷程』はジョンソン自身の『ラセラス』Russellus やスウィフトの『ガリヴァ』Gulliver やヴォルテールの『ザディック』Zadig とは違つた類の想像から生れたものである。それは自然的想像 (Natural Imagination) ともいふべきものであらう。技巧的想像 (Artificial Imagination) ではない。作者と作中の人物は一つのもの表と裏である。バニヤンはクリスチアンであり、クリスチアンはバニヤンである。クリスチアンの中にバニヤンの現れる時には客観的描寫がくづれ、直接敘法と間接敘法

が錯亂する。作者はその場その場の光景を裏付ける所の経験に没頭する。その結果、構想の表面に現れた筋の一致が破れたり、前後が矛盾するやうなことになる。それらは缺點であるには相違ない。しかしながら、その缺點を通して、例へば纏んだ布の裂け目から燦めく金光のやうに貴い精神の閥歴を辿り得る者でなければ『天路歷程』の文學的價値を評價することは出来な。ス。スペンサーを讀んだことがあるだらうとか、ギローム・ド・ギルヴィルの『人間の巡禮』Le Pèlerinage de l'Homme を知つてゐたとかいふやうな穿鑿は徒勞である。バニヤンの體驗にはあらゆる寓意文學の源泉が潜んでゐた。その表現に似たところがあるのは自然的想像の必然性に依るものであつて、意識的な模倣の結果ではない。『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。』と、徳川家康はその家訓の第一條に記してゐる。バニヤンと家康とは、思想、境遇、その他殆んどあらゆる方面に於いて違つた性格であり、時代から言つても場處から言つても、先づ無關係の人物であるが、それぞれの一生をふり返つて見た時の或利那の経験と表現の間には符節を合はすやうに似たところがあつたものと思はなければならぬ。『天路歷程』の中に重荷を負うて遠き道を行く者は、クリスチアンであり、バニヤンであり、更に又、すべての人の象徴である。

表誤正部一第程歴路天

三三三三 三三三三三二二二二二二二二	頁
一一一〇九八八三二〇九八八七七七六六四四三二九七六三二二二一 一	
七六四四 一一〇四二一一一〇六一八六八〇七四四七二九八七一三〇九七五〇八 五八	
一 一 一 一 一	行
一八二五 八二四一四三二七二三四二五七一七一〇四八四六三四八一六一三五八 四三	
クヴ大益益益仰二行さ八無當デ與い王一スいき絶へ四兩とウア八新カ出エFoot眞書撰 リエ澤正富富富せ入ら智重座イへた一きえブ九面いアル五遭にイカヴアン スエ十英十六郎年氏重重になつたすこと 味 味 の フ ら し 田 二 バ リ 立 つ て ナ ア ス 郎年 雄雄になつたこと が 味 味 の フ ら し 田 二 バ リ 立 つ て ナ ア ス 郎年 雄雄になつたこと が 味 味 の フ ら し 田 二 バ リ 立 つ て	誤
クヴ長大益益益と二行さ八無當デ與い王一スいき絶へ六兩とウア一お新カ出エFoot眞書撰 リエ澤正本本本仰人ひら智座イへた侯三きえブ九面いアル五遭にイカヴアン スエ十英十六郎年氏重重になつたすこと 味 味 の フ ら し 田 二 バ リ 立 つ て ナ ア ス 郎年 雄雄になつたこと が 味 味 の フ ら し 田 二 バ リ 立 つ て	正

『天路歴程』第一節 初版正誤表



12278

天路歷程 第二部



昭和二十三年四月二十日印刷  
昭和二十三年四月二十五日發行

定價 金九十五圓

譯者 竹友藻風

發行者 西村大治郎

印刷者 河北喜四良

京都市中京區二條通柳町東入

發行所 株式會社 西村書店

京都市中京區衣通三條上九  
振替口 慶京都二六一六二  
電話本局二〇四八  
日本出版協會會員登記A二一四一三三

配給元 日本出版配給株式會社

東京都千代田區神田淡路町二ノ九

(河北印刷工業所印刷・製本)

壽岳文章譚	エルサレムへの道 <small>(ブレイク詩文選)</small>	六〇圓
竹友藻風譚	天路歷程第一部	六五圓
志賀勝譚	ソーロの言葉	五〇圓
同	エマソンの言葉	近刊
松村克己著	交りの宗教 <small>(ヨハネ書翰講釋)</small>	七〇圓
氣賀重躬譚	ジョン・ウエスレイ信仰日誌	近刊
服部英次郎譚	聖アウグステイヌスの言葉	近刊
山崎亨著	舊約聖書	近刊
蛭沼壽雄著	新約聖書	近刊
壽岳しづ著	朝野に歌ふ <small>(小説)</small>	五〇圓
同	荒野に歌ふ <small>(隨筆集)</small>	近刊
竹友藻風譚	ルバイヤット <small>オーマー・カイヤム四行詩集</small>	九〇圓

1.2.95

年 23. 7 月 23 日 2897

2895		2897	2898	2899
	2896			

町田山崎

終

